

平成 28 年 2 月 13 日
明日香村教育委員会

明日香村発掘調査報告会

2015

調査報告 1:00 ~

「飛鳥寺西方遺跡・牽牛子塚古墳の調査」長谷川透

「藤原京左京九条三坊の調査」高橋幸治



飛鳥寺西方遺跡

講演 2:40 ~

「考古学から探る斉明女帝」

講師 木下正史氏

明日香村文化財顧問
東京学芸大学名誉教授



1. 牽牛子塚古墳 2. 越塚御門古墳 3. 真弓鐘子塚古墳 4. 小谷古墳 5. 益田岩船 6. 沼山古墳 7. 与楽古墳群 8. 岩屋山古墳 9. スズミ1号墳
10. スズミ2号墳 11. カツヤママ古墳 12. 真弓ミツツ古墳 13. 真弓テラノマエ古墳 14. マルコ山古墳 15. 佐田遺跡群 16. 東明神古墳 17. 佐田2号墳
18. 佐田1号墳 19. 出口山古墳 20. 森カシタニ遺跡 21. 森カシタニ塚古墳 22. 向山1号墳 23. 薩摩遺跡 24. 松山香谷古墳 25. 清水谷古墳
26. ホラント遺跡 27. 阿部山遺跡群 28. 稲村山古墳 29. 観音寺遺跡 30. キトラ古墳 31. 阿部山廃寺 32. 吳原寺跡 33. 檜隈門田遺跡 34. 檜前大田遺跡
35. 檜隈寺跡 36. 坂ノ山古墳群 37. 桧前上山遺跡 38. 御園チシアイ遺跡・御園アライ遺跡 39. 塚穴古墳 40. 高松塚古墳 41. 火振山古墳 42. 中尾山古墳
43. 平田キタカワ古墳 44. 梅山古墳 45. カナツカ古墳 46. 鬼の狙・雪隔古墳 47. 野口王墓古墳 48. 川原下ノ茶屋遺跡 49. 亀石 50. 西橋遺跡 51. 定林寺跡
52. 菖蒲池古墳 53. 五条野宮ヶ原1号墳・2号墳 54. 五条野向イ古墳 55. 五条野城脇古墳 56. 五条野内垣内古墳 57. 植山古墳 58. 五条野丸山古墳
59. 軽寺跡 60. 石川精舎 61. 檀原遺跡 62. 田中廢寺 63. 和田廢寺 64. 雷丘北方遺跡 65. 大官大寺跡 66. カセヤ塚古墳 67. 庚申塚古墳 68. 山田寺跡
69. 上の井手遺跡 70. 奥山久米寺跡 71. 奥山リウゲ遺跡 72. 雷丘東方遺跡 73. 雷丘 74. 豊浦寺跡 75. 石神遺跡 76. 飛鳥水落遺跡 77. 飛鳥寺西方遺跡
78. 飛鳥寺跡 79. 飛鳥東垣内遺跡 80. 竹田遺跡 81. 小原シウ口遺跡 82. 八釣・東山古墳群 83. 東山マキド遺跡 84. 金鳥塚古墳 85. 飛鳥池工房遺跡
86. 酒船石遺跡 87. 飛鳥京跡 88. 飛鳥京跡苑池 89. 甘樫丘東麓遺跡 90. 川原寺裏山遺跡 91. 川原寺跡 92. 橋寺跡 93. 東橋遺跡 94. 鳥庄遺跡
95. 石舞台1〜4号墳 96. 石舞台古墳 97. 馬場頭古墳群 98. 打上古墳 99. 都塚古墳 100. 戒成組田古墳 101. 坂田寺跡 102. 飛鳥稻淵宮殿跡
103. 塚本古墳 104. 朝風廢寺 105. 稻淵ムカンダ遺跡 106. 狐塚

飛鳥地域周辺遺跡分布図

飛鳥寺西方遺跡の調査

明日香村教育委員会

調査地：奈良県高市郡明日香村大字飛鳥

調査原因：範囲確認調査

調査面積：316.2 m²

調査期間：2015年10月8日～現在継続中

1. はじめに

飛鳥寺西方遺跡は、飛鳥寺西門の西側を南北約200m、東西約200mにわたって広がる飛鳥時代の遺跡である。この範囲確認調査は飛鳥寺西方遺跡の範囲と構造を明らかにすることを目的としている。平成20年度から実施し、今回で8年目の調査になる。

飛鳥寺西側一帯は、『日本書紀』に度々登場する「飛鳥寺西槻」の地に推定されている。この「飛鳥寺西槻」は、壬申の乱時には軍営が置かれ、蝦夷や隼人などの辺境の人々への饗宴が行われた場所として記されている。このほか、大化の改新前夜に、中大兄皇子と中臣鎌足が蹴鞠を通じて出会った場所とも考えられている。文献史料を読み解くと、飛鳥寺の西側には、槻の樹があり、大勢の人々を集めて饗宴や軍営を置くほどの広い空間が広がる“槻樹の広場”があったと考えられている。

今年度の調査地は、飛鳥寺西門跡から南西へ約60mにある水田である。本調査地の北側は村教委が平成24年度に調査を実施し、調査区一面に石敷が確認された（『明日香村の文化財18 飛鳥寺西方遺跡』）。また本調査区東側は、橿原考古学研究所による飛鳥京第11次調査が実施され、幅4.3mの石敷帯と砂利敷を検出した（『橿研1980『飛鳥京跡二』）。このように調査地周辺は飛鳥時代の遺構が広範囲に展開していることから、今回の調査地でも石敷などの遺構の検出が期待された。今回は調査区を2か所設定し、鉤の手状の調査区を1区、南西にある小調査区を2区とした。

2. 飛鳥寺西方遺跡における既往の調査

| | | |
|---|---------|--|
| 橿 | 飛鳥京11次 | 石敷帯、砂利敷、南北石組大溝、南北石組小溝 |
| # | 飛鳥京18次 | 石列 |
| 奈 | 飛鳥寺西北 | 縁石、礫敷、瓦敷 |
| # | 1996-2次 | 南北石組大溝、掘立柱塀、土管暗渠、南北石組小溝 |
| 明 | 平成20年度 | 一部で石列を確認 |
| # | 平成21年度 | 西門門前に延長する南北石組溝、土管暗渠、石敷帯の延長部、砂利敷、柱穴 |
| # | 平成22年度 | 飛鳥川の氾濫原 |
| # | 平成23年度 | 西門門前に延長する南北石組溝、木樋暗渠、東西石組小溝、石列、砂利敷、柱穴、素掘溝（奈良時代） |
| # | 平成24年度 | 西門門前に広がる砂利敷、不整形の石敷、大型土坑2基（内1基は井戸カ） |
| # | 平成25年度 | 東西石組溝、焼土充填の柱列、砂利敷 |
| # | 平成26年度 | 東西に2間×7間の掘立柱建物2棟、砂利敷 |
| # | 平成27年度 | 南北石組溝、2段積み石列、土器集積遺構（平安時代） |

※橿は橿原考古学研究所、奈は奈良文化財研究所、明は明日香村教育委員会の略とした

3. 主な検出遺構と出土遺物

1区遺構面で石組溝、上層の暗褐色土中で平安時代の土器集積遺構1・2を検出した。2区では石列を確認した。

石組溝

1区西側で検出した石組溝である。南北方向を主軸とする溝で、調査区では南北に8mにわたって確認した。溝は深さ6cmを測る。溝は同じ場所で2時期の造り替えがあり、溝の幅と方位に振れに違いがある。大型の石組溝は幅105cmで、長さ約60cmの側石を溝に対して平行に並べてい

る。ほぼ正方位であるが、北でみて西に3°振れている。側石のレベルは南から北に向かって低くなる。溝の深さは約22cmを測る。埋土は礫混じりの砂質土である。小型の溝は大型の石組溝廃絶後に同じ位置で据え置かれた溝である。側石は西側石のみが残存し、東側の側石はすべて抜き取られている。側石の抜き取痕跡から計測して溝幅は62cmを測り、深さは6cmを測る。残存するもので側石は約20~40cm大と揃いの石を用いている。溝の底面には、底石が敷かれ、約20cm大の上面が平坦な石を横に3石単位に並べている。方位は北でみて西に5°振れており、わずかに方位を異にする。重複する大小の石組溝はともに側石のレベルが南から北に向かって低くなっている。溝埋土から時期がわかる遺物は確認できなかった。

土器集積1

1区南側で確認した。土師皿を数枚単位に重ねて等間隔に配置した遺構である。土師皿を5~8枚重ねたものを1組にして、3箇所110cm間隔で据え置かれていた。土師皿はいずれも完存するが、皿以外の遺物は認められない。また1組ごとに皿を据え置くための据え付け掘形が認められることから、意図的に埋納したものと考えられる。3箇所が一行に並ぶ土師皿埋納遺構の北側には大型の土師皿が2枚重ねて置かれ、さらに北側に接して炭が充填された長方形の土坑も検出した。土坑の周囲が被熱していることから火床であったとみられる。大小の土師皿が三方に並びその近くで火床とみられる土坑が配置されていることから一連の土器集積遺構であったと考えられる。

土器集積2

1区中央付近で検出した。土師皿2枚合わせ口にしたものを5組集積した遺構である。5組の内、3組は上に重ねた土師皿が欠落する。他2組は土師皿が重なった状態で完存する。掘形は認められないが、浅い穴を掘って据え置いたか土を被せて安置した可能性が高い。合わせ口の内部から遺物は認められなかった。

このほかにも、平安期の遺構として焼成遺構、ピット（小穴）などがある。

石列

2区調査区で検出した。東西方向に3m分確認できた。石列は方位が西に見て北に22°振れている。約30cm大の川原石を南側に面を揃えて2段積みにする。南側が一段低く礫混じりの灰色砂質土で埋め立てられ、最終的に黄褐色砂質に覆われる。周辺の調査で黄褐色土上面に砂利敷が敷かれていることが層位的に確認されていることから、この石列砂利敷以前には埋め立てられていることがわかる。石列を境に堆積状況が異なり、南側に面を持つことからこの石列は護岸のようなものであったと考えられる。

なお出土遺物は1、2区から土師器、須恵器、瓦、黒色土器、緑釉陶器、土馬、鉄滓などである。その多くが暗褐色土からの出土であり、平安時代が中心である。

3・まとめ

調査の結果、飛鳥時代の石組溝とそれより古い時期の石列、平安時代の祭祀遺構を確認することができた。この石組溝は既往の調査につながる石組溝は確認しておらず、新出の石組溝である。ただこの石組溝は検出レベルにおいて、隣接する24年度調査の砂利敷面と比高差が10cm満たないことから、同一面に遺構が敷設された可能性が高い。よってこの石組溝は広範囲に広がる砂利敷の排水や区画を表示するためのものと考えられる。

そして、新たに確認した石列は24年度調査で確認した砂利敷面よりも下層にあることから、砂利敷以前に造られた遺構であることが明らかとなった。石列の方位は、飛鳥寺西方遺跡における既往の調査と対応するものはない。層位的に見ても砂利敷以前は間違いなく、正方位とは異なる方位の振れは飛鳥時代でも古い様相を示すものである。周辺遺跡の調査事例との比較・検討によってさらなる解明ができるものとする。

また、土器集積遺構は平安時代における寺院周辺祭祀の痕跡を確認することができた。周囲には焼成遺構や集石を並べた遺構、1点だけだが土馬も確認していることから、この地で複数回の祭祀行為が行われていることも明らかとなった。なかでも土器集積遺構は意図的に配置し、短い期間での時期差が認められる。寺院周辺での結界祭祀である可能性が考えられる。いずれにせよ平安時代での複数回の祭祀行為は、古代においても飛鳥寺西が特別な空間であったと考えられる。飛鳥寺西地域が飛鳥時代から平安時代において儀礼・祭祀の場として利用された状況を示していると考えられる。古代の活発な土地利用により飛鳥時代の遺構が一部壊されているものの、飛鳥

時代以後の飛鳥寺西を考えるうえでは重要な資料となるであろう。

これまでの調査によって、飛鳥寺西側は石敷の広場として利用されていたことが明らかになりつつある。しかし、今回の調査では槻樹に迫ることができなかったが、飛鳥寺西における土地利用の変遷と飛鳥時代から平安時代の長期間にわたって儀礼・祭祀の場として利用された飛鳥寺西の特殊性を明らかにすることができた。さらなる周辺の調査によって、飛鳥寺西の全貌解明が期待される

※※※関連史料（『日本書紀』）※※※

① 皇極三年（644）正月乙亥朔条

中臣鎌子連、（中略）偶に中大兄に、法興寺の槻樹の下に、打毬の侶に預りて、皮鞋の毬の隨に脱げ落つるを候りて、掌中に取置ちて、（後略）

② 孝徳即位前紀大化元年（645）六月乙卯条

天皇、皇祖母尊、皇太子、大槻樹の下に群臣を召集めて盟はしめたまふ。

③ 齊明三年（657）七月辛丑条

須彌山しゆみせんの像を飛鳥寺の西に作る。且つ孟蘭盆会もうらんぼんのけがみを設く。暮とくらひとに都貨羅人あひに饗たまふ。

④ 齊明5（659）年三月

甘櫓丘の東の川上に、須彌山を造りて、陸奥と越との蝦夷に饗たまふ。

⑤ 天武元年（672）六月己丑条

爰に留守司高坂王、及び兵を興す使者穗積臣百足等、飛鳥寺の西の槻の下に據りて營を為す。（中略）爰に百足馬に乗りて緩く来れり。飛鳥寺の西の槻の下に逮るに、（後略）

⑥ 天武六年（677）年二月条

是の月、多禰島人たねの等らに飛鳥寺の西の槻の下に饗へたまふ。

⑦ 天武九年（680）七月甲戌朔

飛鳥寺の西の槻の枝、自ら折れて落つ。

⑧ 天武十年（681）九月庚戌条

多禰島の人等らに飛鳥寺の西の河邊たねべに饗し、種種の樂を奏す。

⑨ 天武十一年（682）七月戊午条

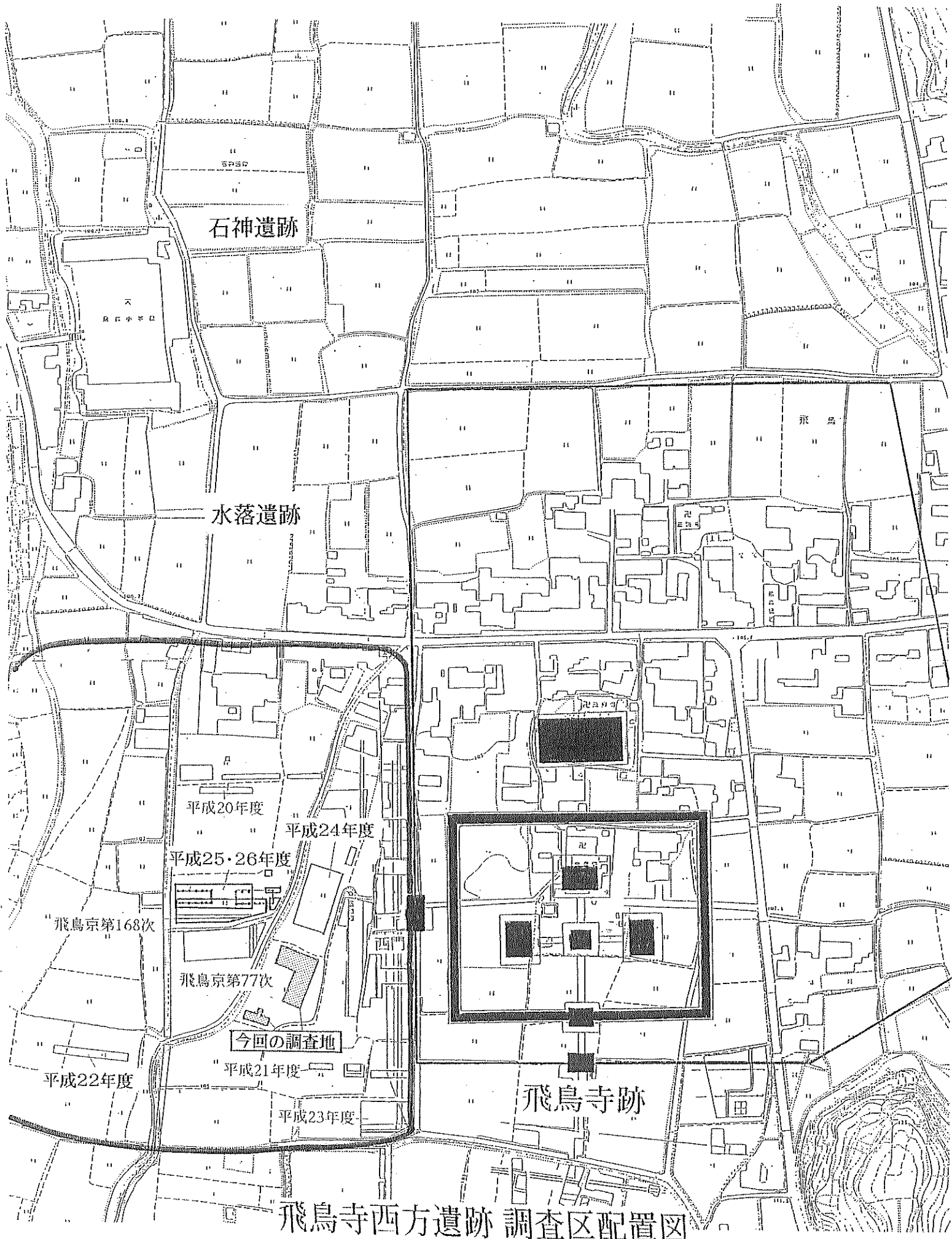
隼人等らに飛鳥寺の西に饗へたまひ、種種の樂を発す。

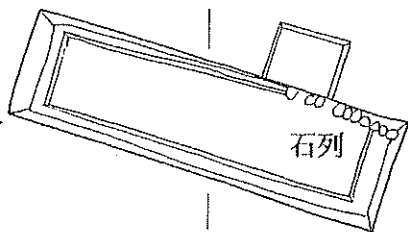
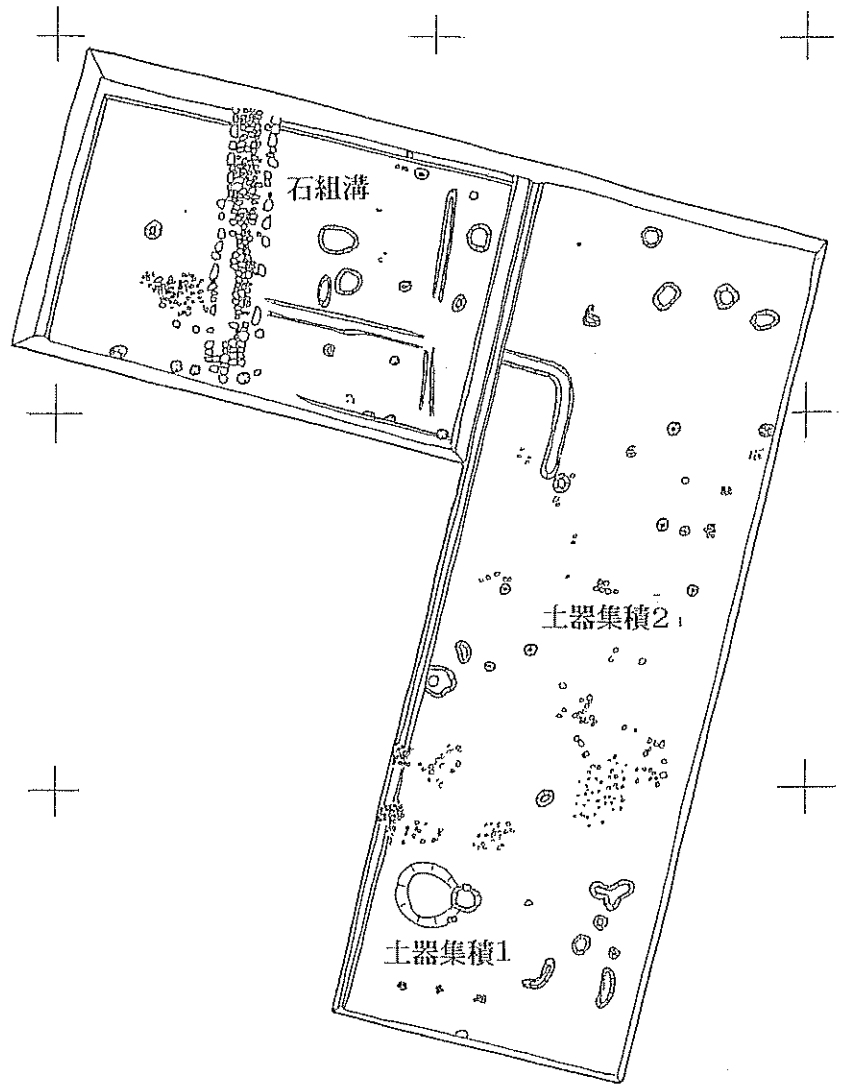
⑩ 持統二年（688）十二月丙申条

蝦夷の男女二百一十三人を飛鳥寺の西の槻の下に饗へたまふ。

⑪ 持統九年（695）五月丁卯条

隼人はやとの相撲を西の槻の下に観したまふ。





遺構平面図(S=1/200)

牽牛子塚古墳・越塚御門古墳の調査

明日香村教育委員会

調査地：奈良県高市郡明日香村大字越
調査原因：牽牛子塚古墳等整備事業に伴う発掘調査
調査面積：約70㎡
調査期間：2015年5月～10月

はじめに

牽牛子塚古墳と越塚御門古墳は「真弓崗・越智崗」と呼ばれる一角に所在する終末期古墳である。周辺のいわゆる西飛鳥地域には真弓カンス塚古墳、カヅマヤマ古墳など多くの終末期古墳が点在する。牽牛子塚古墳は江戸時代には朝顔を意味する「ケンゴウシ」と呼ばれ、墳丘の形が名前の由来となったことを連想させる。明治時代には石槨が開口していた様子が描かれており、現況に近い状況だったことがわかる。大正時代には古墳の調査が行われ、阪合村役場によって保存工事が行われている。大正12年には牽牛子塚古墳が史跡名勝天然記念物に指定された。昭和52年には明日香村によって環境整備事業が行われ、石槨前面が調査されている。

平成21年度から世界遺産登録に向けた構成資産のひとつとして、古墳の構造解明に向けた範囲確認調査が行われた。この調査によって牽牛子塚古墳の墳丘規模や形状、構造などが明らかとなり、さらに古墳の南東側から新出の越塚御門古墳が発見された。『日本書紀』天智紀との関連が注目され、大王墓と終末期古墳の関係を考えるうえで重要な調査成果となった。

平成25年11月、牽牛子塚古墳の史跡追加指定・名称変更が答申され、平成25年12月に牽牛子塚古墳整備検討委員会(以下検討委員会)が設置された。そして、平成26年度、検討委員会により牽牛子塚古墳・越塚御門古墳整備基本計画が策定された。

今回、この検討委員会での議論で課題にあがった墳丘傾斜角度や過去の未調査部分を中心に発掘調査を実施した。

調査の概要

調査区は4箇所を設定した。牽牛子塚古墳の北東側にある調査区を1区として、南側調査区にかけて順に1～4区と設定した。

1区

牽牛子塚古墳の北東側に設定した調査区。

主な検出遺構は、墳丘盛土、凝灰岩石敷の抜き取り痕跡、バラス敷である。

墳丘盛土は、調査区南端で確認した。後世の攪乱により墳丘盛土は削られており、墳丘の残存高は約1mである。墳丘裾部は後世による凝灰岩石敷や墳丘貼石の抜き取りにより削平されているが、盛土の削平部分には墳丘盛土の版築層が確認できる。

凝灰岩石敷の抜き取り痕跡は、古墳盛土の北側で確認した。抜き取り痕跡は幅1m、深さ25～30cmである。抜き取り後の埋土は灰オリーブ色粘質土で、凝灰岩や遺物は含まない。かつて古墳の西側で確認されていた凝灰岩石敷と同じ規模であり、八角形を復元した場合の延長線上に位置するため凝灰岩石敷の抜き取り痕跡と判断した。

バラス敷は凝灰岩抜き取り痕跡の北側に接して確認した。拳大の石を幅1.2mにわたって敷きつめるが、古墳の外周部に向かってやや傾斜している。西側の一部は後世の崩落により残っていない。バラス敷の北端では約40cm大の細長い石を使った東西方向の仕切り石を2石分確認した。バラス敷の検出レベルはH=120.6mを測り、古墳西側で確認されていたバラス敷に比べ約50cm低い。このバラス敷は古墳の南西側で確認されたバラス敷から八角形に復元した延長線上に位置するが、仕切り石までの幅が南西部に比べ約20cm大きくなる。

外周法面はバラス敷の仕切り石の外側にみられる傾斜面である。傾斜面の盛土は大きく2層あり、上部にはバラス敷のための整地層、下部には版築層がある。整地層は厚さ約70cm、版築層は約1.9m分確認した。整地層は黄褐色砂質土の単一層からなるが、版築層は灰黄褐色砂質土と明黄褐色砂質土を約5cm単位で交互につき固めている。傾斜面は仕切り石を境に傾斜し、仕切り石か

ら外側約 2.5m の位置で平坦面となる。この傾斜面には貼石などの外表施設を設置した痕跡は認められなかった。この傾斜面は古墳外周部の法面に相当し、古墳外周の法面角度は約 45 度を測る。

2 区

墳丘東側に設定した調査区。倒木などの調査区の制約上 2 か所に分け、西側を 2-1 区、2-2 区とした。

2-1 区

調査の結果、花崗岩風化土の地山を確認したのみである。地山は東側に向かって急激に傾斜し、調査区中央付近で平坦となる。その傾斜変換点に大正時代の史蹟標柱を検出した。また、調査区の東端で深さ 1.1m ほどの地山の落ち込みを検出した。この落ち込み内には固く締まった堆積層が 30 cm 単位で埋め立てられており、古墳築造以前に埋め立てられたものと考えられる。地山上面では古墳本来の盛土は残存せず、大正時代の史蹟標柱が完全に埋もれるなど、近年まで古墳盛土の流出が顕著に認められた。

2-2 区

調査の結果、地表下 1.5m で地山を確認した。地山は 2-1 区東端で確認された地山の落ち込み底面から続く平坦面を確認したのみである。上層には固く締まった埋め立て土が認められた。

3 区

牽牛子塚古墳の南東部にある一段低い平坦面に設定した東西方向の調査区。調査区の東側で地山を検出した。この地山は牽牛子塚古墳に向けやや落ち込んでいる。調査区一帯は後世の削平を受けているとみられ、古墳に伴う遺構は確認できなかった。

4 区

越塚御門古墳の北側に設定した南北方向の調査区。調査区の北側では、崩落した牽牛子塚古墳の墳丘土を確認した。調査区南側では越塚御門古墳の盗掘や後世の削平の痕跡を確認した。盗掘埋土の下では越塚御門古墳の墓壙を確認した。平成 23 年の越塚御門古墳の調査で確認した墓壙の延長上にあり、墓壙の北側に相当する。平成 23 年度の調査では墓壙の上で越塚御門古墳の墳丘土をわずかに検出していたが、今回は確認できなかった。

まとめ

調査の結果、1 区で牽牛子塚古墳に関する顕著な成果を得ることができた。以下列記する。

- ・墳丘裾をめぐるバラス敷が古墳北東部分でも確認された。
- ・バラス敷北側には古墳の土台となる外周法面（墳丘基盤土）が遺存し、版築によって造成されていた

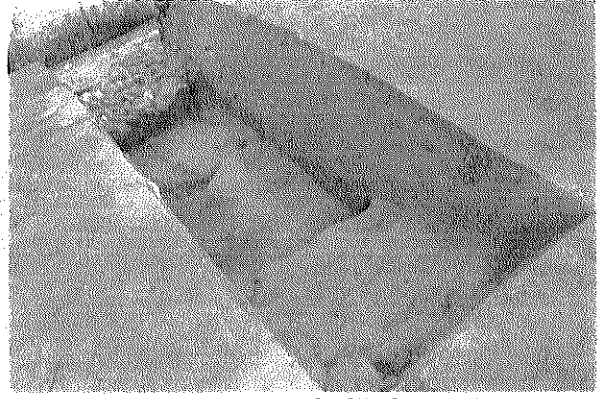
牽牛子塚古墳は墳丘のさらに外側一帯から大規模に版築による造成によって造られたことが明らかとなった。1 区で検出したバラス敷や凝灰岩敷石抜き取り痕跡は、八角形墳の推定復元図に照らし合わせると、推定位置にあてはまる。古墳裾部のバラス敷き及び凝灰岩敷石は墳丘八角形に沿って施されていたことが確実となった。ただしバラス敷きは仕切り石を挟んで 2 重に広がっていたかは今後の検討を要する。墳の北東部は現地地形を見ても八角形の一辺の名残がある。1 区の凝灰岩敷石抜き取り痕跡及びバラス敷が遺存していたことは、古墳の北東部が後世に大きく崩落していないことを裏付ける。それは古墳の土台となる古墳の外周部分を下から版築によって造成したためと考えられる。古墳築造するために地山の痩せている部分には大規模に版築を施し、より強固な土台を築く必要があったと考えられる。墳丘に腰高な段築を築き、古墳の外装には凝灰岩貼石を全面に施すには古墳に相当な荷重があったことが容易に推測される。古墳築造にあたり計画的に墳丘のさらに外側から版築による土台作りを施していたと考えられる。八角墳の築造過程を考えるうえで重要な成果を得ることができた。



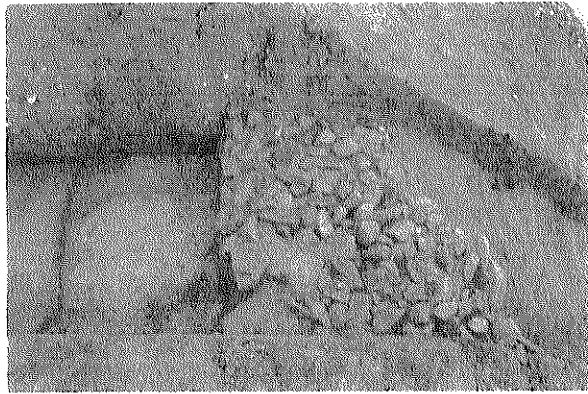
調査区配置図



1区 全景(北から)



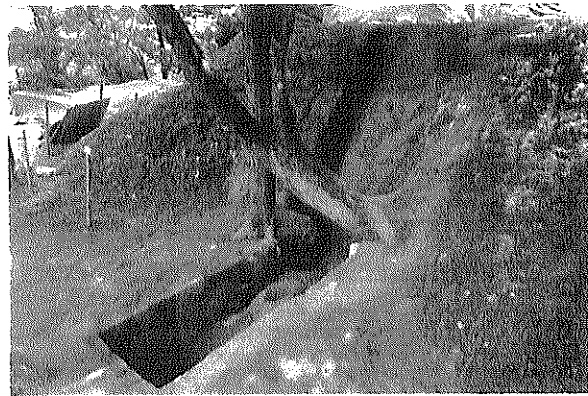
1区 墳丘裾部(南西から)



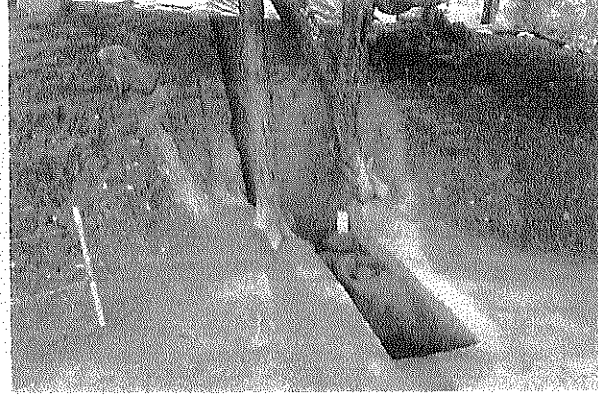
1区 凝灰岩石敷抜き取り痕跡とパラス敷



1区 外周法面 版築層



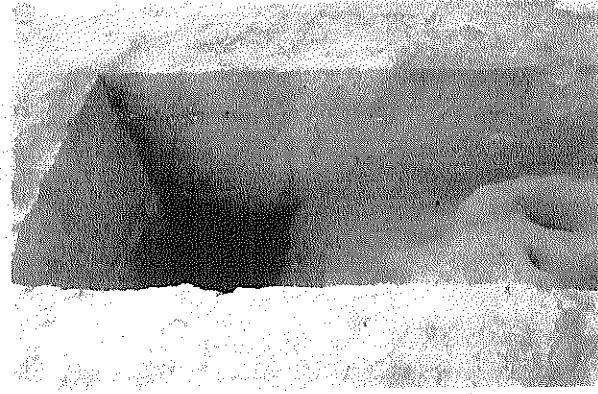
2-1区全景(北東から)



2-1区全景(東から)



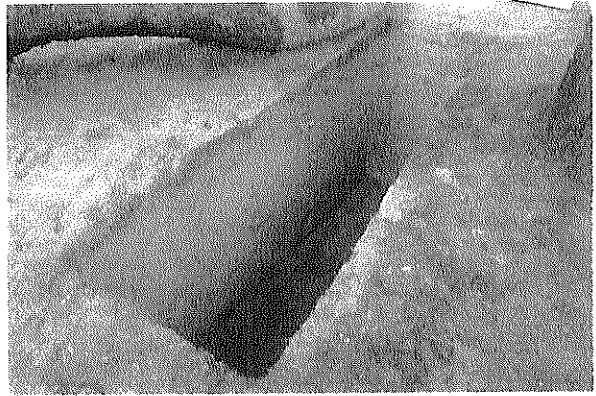
2-1区全景(西から)



2-1区 地山落ち込み(北から)



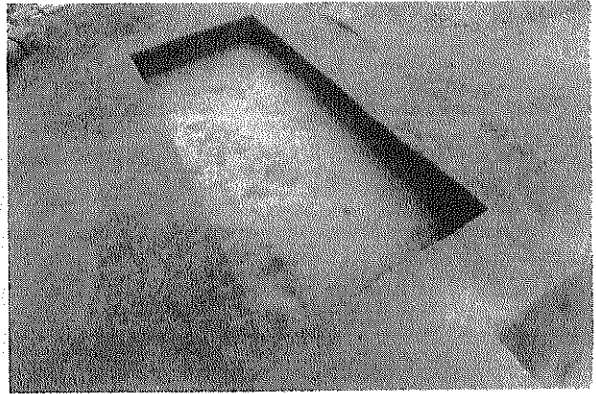
2-2区全景(西から)



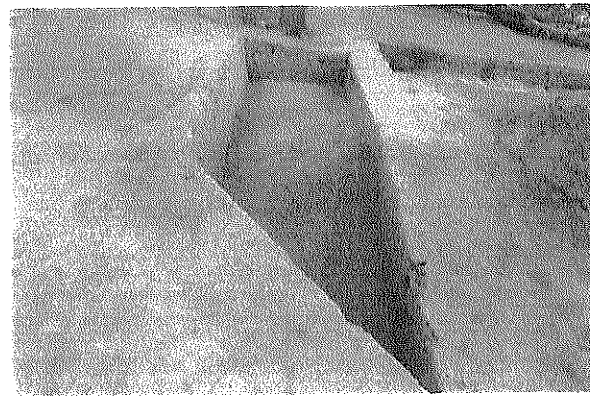
2-2区全景(東から)



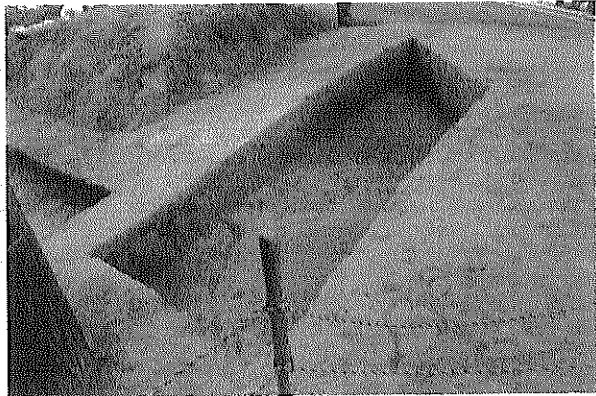
3・4区全景(東から)



3区全景(北西から)



4区全景(南から)



4区全景(北西から)

藤原京左京九条三坊の調査

明日香村教育委員会

調査地：奈良県高市郡明日香村大字小山

調査原因：村道敷設に伴う事前発掘調査

調査面積：360 m²

調査期間：2014年10月27日～2015年2月27日

1. はじめに

この調査は明日香村大字小山において行った。道路敷設にともなう発掘調査である。これまで調査地近辺では、奈文研および榎考研が発掘調査を行っており、周辺における遺跡の概要が明らかになってきている。奈文研の調査では、縄文時代後期～晩期の土器、弥生時代後期の斜行溝・土坑、古墳時代の溝、7世紀もしくは8世紀の掘立柱建物・塀、井戸、土坑、溝、石組暗渠、7世紀中頃の整地土、10世紀の柱穴群、中世の井戸・溝・土坑が検出された。出土遺物には土師器、須恵器、瓦器、瓦、鉄斧、鉄釘、銅滓、銅塊、無文銅銭、楠羽口、砂岩、馬骨などがある（奈文研1980、1981、1982、1987、1990、1993）。榎考研の調査では、弥生時代後期の竪穴建物、土坑、焼土坑、溝など、藤原京期頃の掘立柱建物、井戸、土坑、暗渠状遺構、柱穴、溝などが検出された。出土遺物には弥生土器、石鏃、埴輪、土師器、須恵器、三重弧文軒平瓦、凝灰岩や榛原石の加工石材などがある（榎考研2008）。

調査区は、幅4m、長さ82mで設定した。調査区西側において遺構が検出され、遺物の出土が顕著に見られたため、調査区西側肩部から東へ約16m分を、南側へ約2.5m拡張した。この結果、調査面積は計約360m²となった。調査期間は2014年10月27日～2015年2月27日である。

2. 主な検出遺構と出土遺物

検出遺構

遺構は、掘立柱建物、溝、土坑、整地土などを検出した。以下は、その概要である。

掘立柱建物 SB01

調査区西側付近において検出した掘立柱建物である。東西2間、南北3間以上の南北棟。南側は妻部分を検出していることから、これ以上南には展開しない。一方北側はさらに北へ延びる可能性がある。柱間は、掘形芯々で南北1.4～2.2m、東西1.5～1.8m。柱穴の平面プランは隅丸方形や不整円形で、断面形態は「U字」状もしくは逆台形。柱穴の規模は径0.35～0.6m、残存する深さは0.2～0.7mであった。柱材が残っていたのは、西側柱南から3つ目、東側柱南から2つ目、3つ目、4つ目の4カ所。南側妻部分は西から2つ目

の柱穴に柱材が残っていた。柱材は長いもので長さ約 0.9m、直径約 0.12～0.15mである。土師器、須恵器などが出土。

土坑 SK01

土坑 SK01 は、調査区中央付近北側において検出した。平面プランは不整形である。断面形態は上部がやや幅広の浅い「U字」状で、残存長 1.9m、深さ 0.3m。土師器・須恵器・堅果類、燃えさしなどが出土した。

土坑 SK02

掘立柱建物 SB01 の東側において検出した、平面プランが不整形の土坑である。断面形態は浅い逆台形。検出長 2.5m、深さ約 0.2m。土師器・須恵器・瓦などが出土。

溝 SD01

溝 SD01 は調査区西側付近において検出した南北方向の溝である。掘立柱建物 SB01 西側で検出した。検出長約 3m、検出幅約 3.5m、残存する深さは約 0.5m。断面形態は上部が幅広の「U字」状を呈する。土師器・須恵器・堅果類・木製品・石製品などが出土した。

整地土

調査区のはほぼ全面にわたって検出した。その様相は河川流路の東側と西側で若干異なる。流路東側は黄褐色粘質土の単層で構成される整地土で、上面では遺構を確認しておらず、遺物も含んでいない。この層の直下において素掘り溝を検出した。流路西側は青灰色地山ブロック土を中心とした整地土である。この整地土上面において掘立柱建物、土坑、溝などを検出した。この整地土は土師器・須恵器・瓦などの遺物を含んでいる。

河川流路

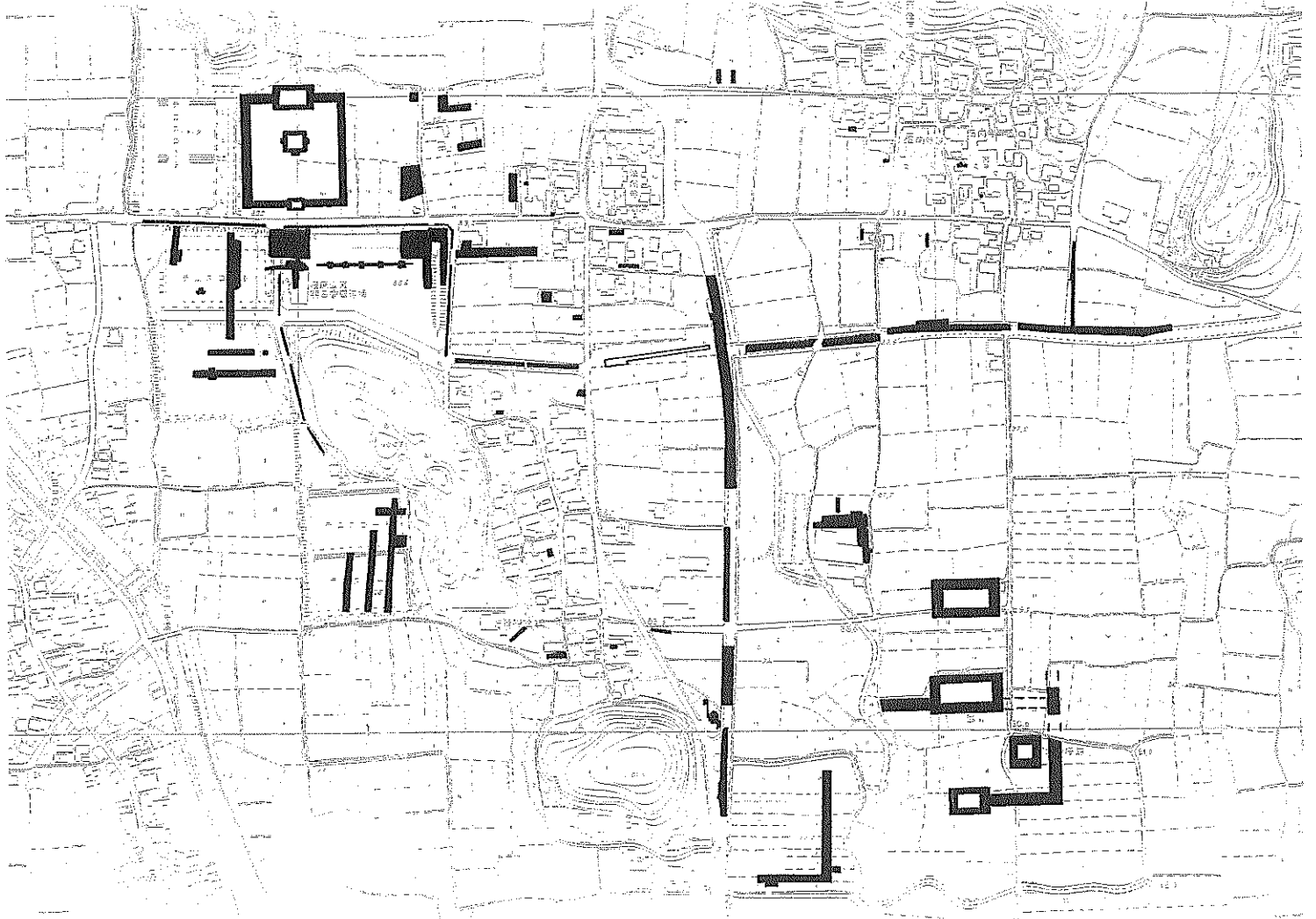
調査地中央やや東寄りでは東側の肩を、調査地西寄りでは西側の肩を検出した。流路内の堆積からは、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、木製品、石製品などが出土。

出土遺物

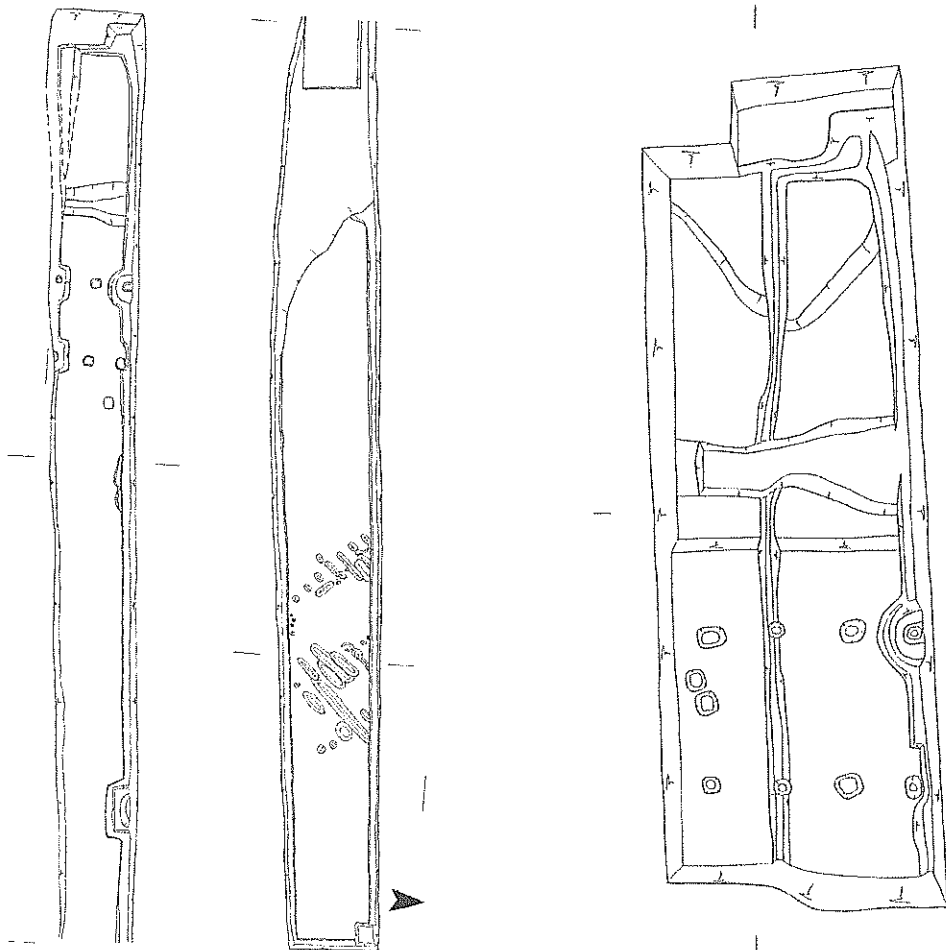
遺物は弥生土器、土師器・須恵器、瓦、木製品、石製品などがある。

3. まとめ

今回の調査では、河川の流路西側肩付近でまとまった土器の集積を確認した。器種には壺、甕、高杯、器台、椀などがある。時期は、弥生時代後期。掘立柱建物は、整地土をベースとしている。整地土には飛鳥時代後半の土器が含まれていることから、建物の所属時期は、この土器段階と併行した時期もしくはそれ以降になる。土坑、溝から出土する遺物にも同時期の土器が含まれる。今回の調査で確認した遺構・遺物は、これまでの、周辺地域における調査によって検出されている藤原京期、あるいはそれ以降に見られる遺構・遺物の様相とも矛盾なく、一体となって展開していたと思われる。したがって、周辺における発掘調査成果と照らし合わせたうえで、遺跡の性格を捉える必要がある。尚、大規模な整地の原因は詳らかにできなかった。さらなる周辺での発掘調査に期待したい。

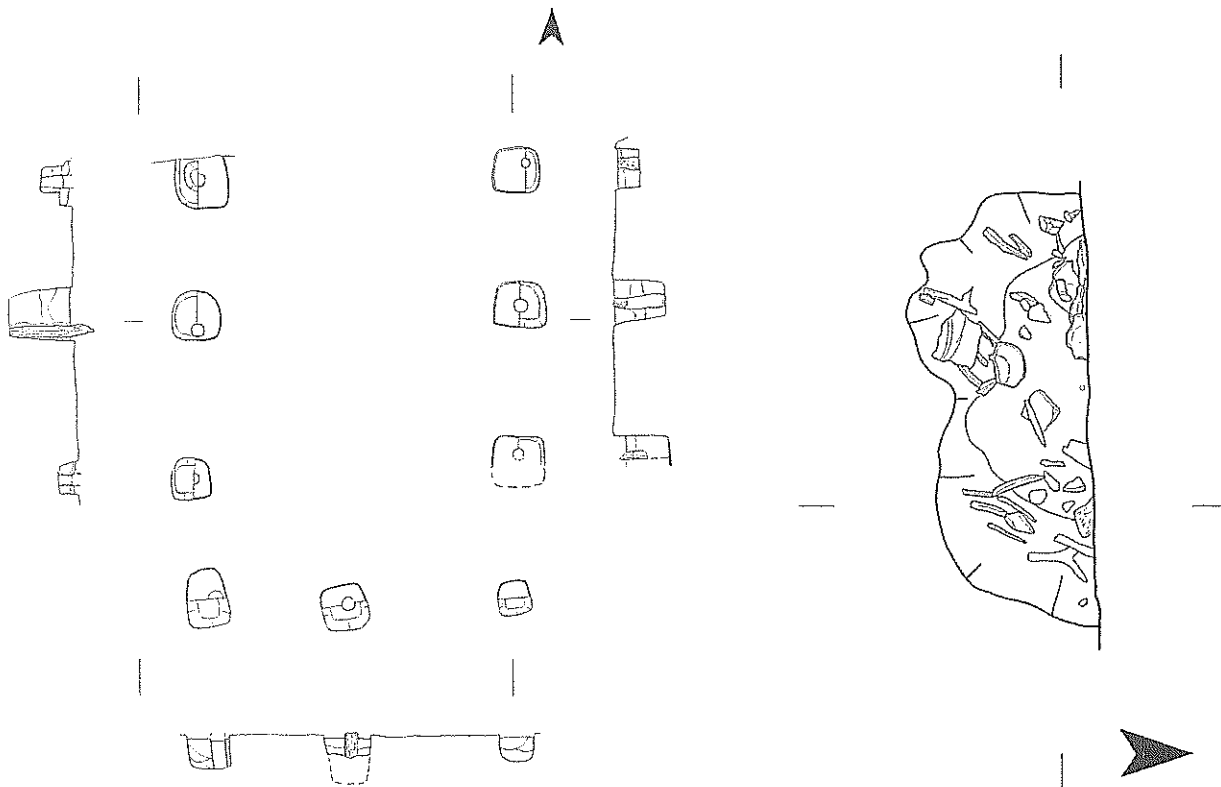


遺跡周辺の調査区



調査区平面図

調査区平面図
(拡張部)

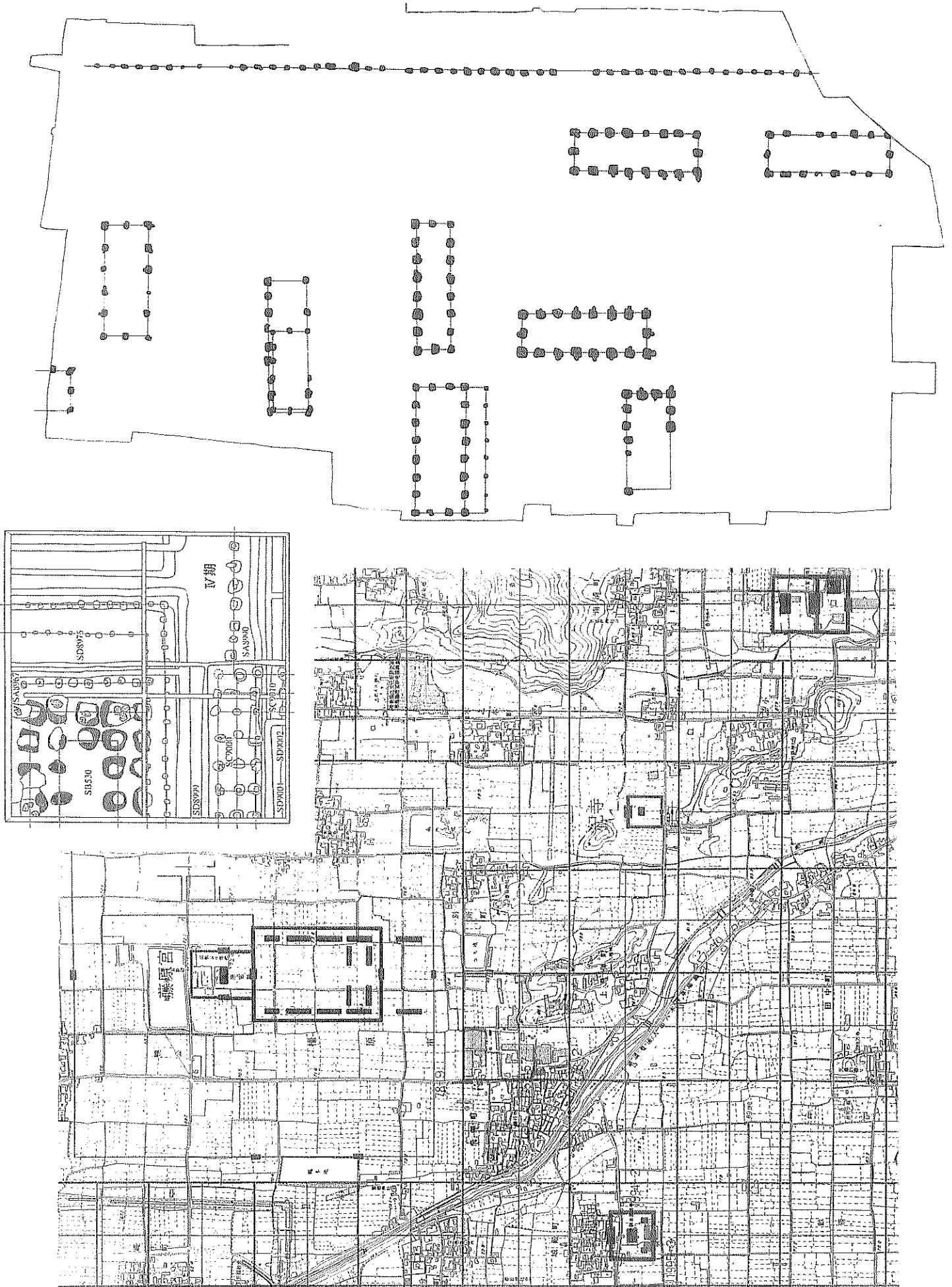


土坑 SK01 平面图

掘立柱建物 SB01 平·断面图



弥生土器出土状况图



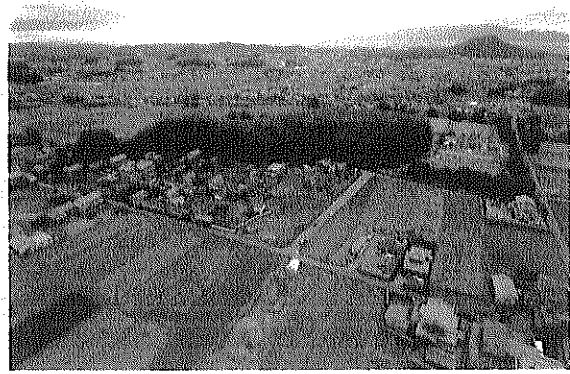
藤原京検出の建物（比較事例）



調査区遠景（真上から・上が北・写真は合成）



調査区遠景（南東から）



調査区遠景（北東から）



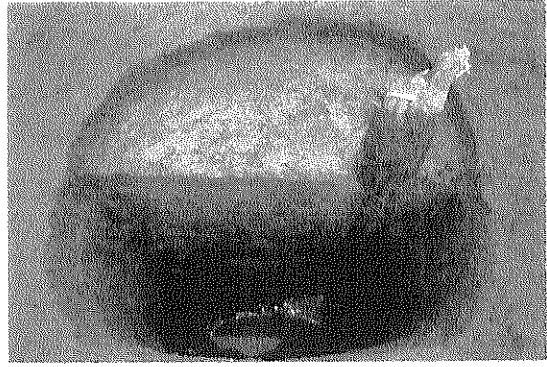
弥生土器出土状況（西から）



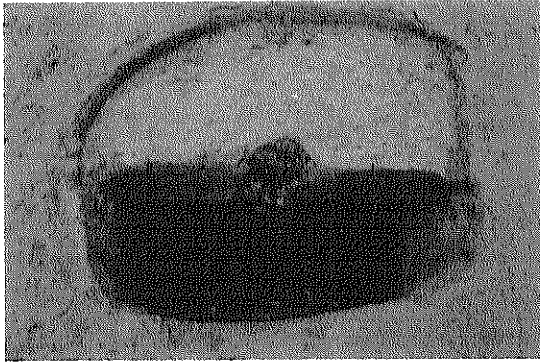
弥生土器出土状況（南東から）



掘立柱建物 SB01 (北から)



柱穴断割 (西から)



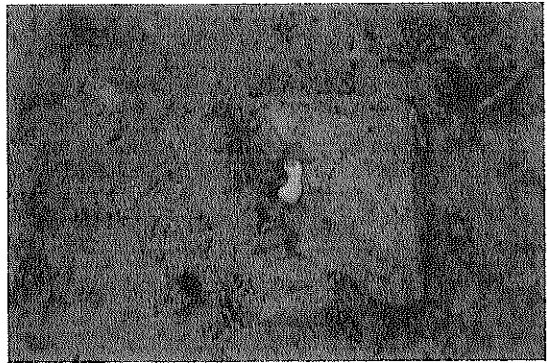
柱穴断割 (南から)



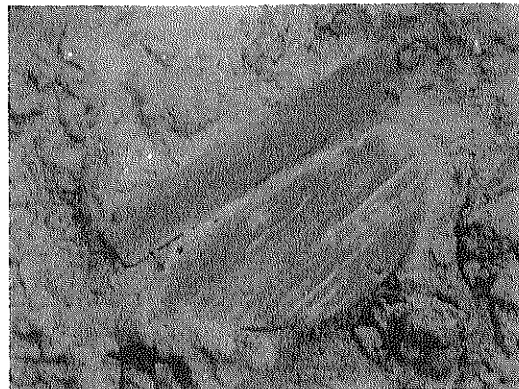
土坑 SK01 遺物出土状況 (北から)



溝 SD01 遺物出土状況 (西から)



溝 SD01 勾玉出土状況



溝 SD01 木製品出土状況 (上から)



弥生土器取上げ作業

講 演

「考古学から探る斉明女帝」

明日香村文化財顧問

東京学芸大学名誉教授

木下正史 氏

考古学から探る斉明女帝

2016.2.13

木下正史

A、『日本書紀』記載の斉明女帝

- 1、皇極天皇：舒明天皇の皇后。舒明天皇崩御後の642年に即位。
 - 1) 舒明天皇と皇后の間の子供：天智天皇、間人皇女、天武天皇。
 - 2) 645年：乙巳の変。蘇我氏滅亡。皇極退位。孝徳天皇即位。難波で新政府成立。
- 2、齐明元年(655)正月：齐明天皇、飛鳥板蓋宮で即位。皇極重祚。皇太子中大兄皇子
 - 1) 元年冬：飛鳥板蓋宮が焼け、飛鳥川原宮に遷る。
 - 2) 元年10月：小墾田に瓦葺の宮殿を造ろうとする。造営材が腐って造営中止。
 - 3) 齐明2年(656)この歳：飛鳥岡本に宮室を建てて遷る。後飛鳥岡本宮という。
 - ①田身嶺に周垣(軍事的施設か)を巡らす。また、嶺の上の両槻の辺に観(たかどの)を起て、両槻宮(ふつきのみや)または天宮(あまのみや)と呼ぶ。
 - ②齐明天皇：「興事を好む」。「狂心の渠」を掘って石上山の石を運び、宮の東山に積んで石垣(石の山丘)を築く。人々はそれを批判。また吉野宮を造営する。
- 4) 齐明3年(657)7月15日：須弥山像を飛鳥寺の西に作る。旦に盂蘭盆会を設け、暮に観貨邏人を饗す。
 - ①齐明4年(658)・5年：阿陪臣を遣わし齶田(あは)・淳代(ぬり)2郡の蝦夷を従わせる
- 5) 齐明4年11月：有間皇子、天皇の三失政をあげて謀反。留守官蘇我赤兄、物部朴井連鮪(すけのいのからしび)を遣し、宮造る丁を率いて有間皇子を市経家(いちふ)に囲む。有間皇子を捉え、紀温湯に送り、藤白坂で首きる。
 - ①齐明4年：沙門智諭(はうしゆ)、指南車を造る。
- 6) 齐明5年(659)3月：甘檉丘の東の川上に須弥山を造り、陸奥と越の蝦夷を饗す。
- 7) 齐明6年(660)5月：皇太子、初めて漏刻を造る。民をして時を知らしむ。また阿倍引田臣、蝦夷50余を献ずる。また、石上池辺に須弥山を作る。高さ廟塔の如し。以て肅慎47人を饗す。
- 8) 齐明6年9月：百濟、達率らを遣して、新羅と唐が百濟を滅ぼそうとしていると、支援を要請。
- 9) 齐明7年(661)正月：百濟を討つために、天皇、海路につく。
 - ①齐明7年3月：船、那大津に至り、磐瀬行宮(いわせのかりのみや)に居る。
 - ②齐明7年5月：天皇、朝倉橘廣庭宮に遷る。
 - ③齐明7年7月24日：天皇、朝倉宮で崩御。皇太子中大兄皇子が称制。
 - ④齐明7年10月7日：天皇の喪、海に就き、23日、難波に伯る。
 - ⑤齐明7年11月7～9日：飛鳥川原で天皇の殯をする。
- 3、齐明天皇の宮殿と関連施設：
 - 1) 齐明天皇の人物像(『日本書紀』)：土木工事を興すことの好きな女帝として描く
 - 2) 後飛鳥岡本宮、宮の東の石山丘(酒船石遺跡)、漏刻、飛鳥寺西方遺跡、園池など

B、後飛鳥岡本宮の遺跡

- 1、後飛鳥岡本宮の場所：明治以来、二説。
 - 1) 香久山南方説：大宮大寺跡付近に推定。
 - 2) 飛鳥寺南方説：飛鳥板蓋宮伝承地とする説。
- 2、伝飛鳥板蓋宮跡：大化改新のクデターで、蘇我入鹿斬殺という政変劇の舞台となった皇極天皇の宮殿(643～655年)。齐明元年(655)に焼亡。
 - 1) 位置：江戸時代(地誌)から明日香村岡集落北方の水田地帯に推定。
- 3、飛鳥宮跡の発掘：上層・下層の宮殿遺跡の存在を確認。さらに重層。
 - 1) 下層宮殿(飛鳥宮Ⅰ期・Ⅱ期)：飛鳥岡本宮(舒明天皇)、飛鳥板蓋宮(皇極天皇)。
- 4、上層宮殿(飛鳥宮Ⅲ-A期・B期)の構造：後飛鳥岡本宮と飛鳥浄御原宮。
 - 1) 内外二重の堀によって区画：「内郭」と、これを大きく囲む「外郭」とから成る。
 - 2) 「内郭」：東西158m、南北197m。周囲を一本柱列(掘立柱堀)で囲む。

- ①掘立柱塀：円柱(径30cm)を3m間隔で立て並べ、屋根をのせ、柱間を壁で塞ぐ。
- ②基壇：幅5.5mの低い基壇(高さ0.2m)を備え、その両側に石組雨落溝を伴う。
- 3) 内郭内部：東西掘立柱塀によって、「南区画」と「北区画」とに二区分。
- 4) 「南区画」：東西158m、南北約45m。
- ①内郭南門：南限掘立柱塀に取りつく。中軸線上に建ち、東西5間、南北2間。
- ②内部：南北掘立柱塀により、中央区・西区・東区に三分。
- 5) 正殿：「南区画」中央区の中心に位置。南門のすぐ北。中軸線上に独立して建つ。
- ①建物：東西7間(20m)、南北4間(11.2m)。四面廂付き東西棟。高床張り。
- ②正殿の前庭と周囲：小砂利敷で舗装。南門までは幅12mと広くない空間。
- ③石敷通路：建物中央の北から北区画へ延びる石敷通路。
- 6) 東区・西区：正殿と塀で区分。脇殿域。南北棟脇殿(南北10間×東西2間)を配置
- 5、内郭「北区画」：正方形区画。東西158m×南北151m。掘立柱塀で小ブロックに区分
- 1) 建物群：高床張りの掘立柱建物が多数近接して建ち並ぶ。階段を伴う。
- ①北部：東西棟が多い。東部は南北棟が多い。建物外は全面丁寧な川原石敷舗装。
- 2) 大井戸：内郭内の東北隅に石敷の洗い場をもつ大井戸。排水施設をもつ。
- ①性格：霊水の湧き出る特殊な井戸。宮廷儀礼などに用いる水を汲む井戸。
- 3) 内郭北区画の南部：同規模・同構造の南正殿と北正殿が南北に並立。
- 4) 正殿：東西8間(23.5m)×南北4間(12.2m)の切妻建物。
- ①正殿の構造：東西の端から2間目の前面・後面に階段。高さ2mほどの高床張り。
- ②正殿の東西：2間×2間の廊下で東西3間(9m)×南北4間(12.2m)の脇殿に接続。
- ③建物群全体：東西18間(54m)×南北4間(12.2m)の巨大建物。石組雨落溝を伴う
- ④建物群の周囲：全面石敷舗装。
- ⑤前庭：南正殿前庭は南北幅12mのバラス敷、北正殿前庭は南北幅22.5mの石敷。
- ⑥建物の解体：柱抜き取り穴。藤原宮期の土器が出土。
- 5) 南正殿と北正殿の性格：
- ①南正殿：諸臣を引き入れて儀式などを行う殿舎。「外安殿」。
- ②北正殿：天皇の居住施設。私性格。限られた人しか入れない区画。「内安殿」。
- 6) 内郭の性格：内裏的性格の空間。規模は3~4%。藤原宮・平城宮・平安宮の内裏内郭とほぼ同規模。天皇の生活空間。
- 6、外郭：
- 1) 東限塀：内郭東限塀の東約106m(=1町。1尺=29.4cmとして小尺360尺、大尺300尺)に位置。盆地の東縁を南北に走る。石組護岸の南北溝外濠を伴う。
- 2) 東限の南北塀の造替え：5条。ほぼ同位置で造り替える。
- ①最古の塀：7世紀中葉以降。
- ②最後の塀：簡素なもの。8世紀後半以降まで存続。
- 3) 外郭の規模：西限を飛鳥川岸までとすると、東西約300m、南北長320m以上。
- 4) 外郭内部の施設：掘立柱建物を何棟か発見。建物外は全面バラス敷舗装。
- 5) 外郭：藤原宮・平城宮の「内裏外郭」とほぼ同大。南北に長い形状も類似。
- ①藤原宮・平城宮の内裏外郭：天皇の日常生活に関わる官衙が所在。
- ②外郭の性格：藤原宮・平城宮の内裏外郭と類似した機能をもつ施設。
- 7、北限の施設：内郭北限塀の北約380mで、東西石組大溝を検出。
- 1) 東西石組大溝：幅1.8mほど、深さ0.8m以上。3段石積護岸。掘立柱塀は未発見
- ①東延長部：東西掘立柱塀を発見。北限は未確認。
- 8、遺跡の年代：
- 1) 外郭の石組外濠下層の土坑状落ち込み出土の木簡：昭和50年調査。
- ①「大花下」：大化5年(649)2月から天智3年(664)2月までの間に使用された冠位名。
- ②木簡伴出の土器：飛鳥Ⅱ。7世紀中葉、650~660年代頃のもの。
- ③上層遺構の年代：これら遺物の示す年代を遡らない。
- ④意義：斉明朝に属する宮殿遺跡、すなわち後飛鳥岡本宮の存在を示唆。

C、酒船石遺跡

- 1、酒船石：特異な形。東西5m、南北2mの巨大な花崗岩に、円形・楕円形状の凹みを複数彫り凹め、凹みの間を断面U字形の真直ぐな浅い溝でつなぐ。
 - 1) 位置：飛鳥宮跡の東北方。飛鳥盆地の東を限る丘陵で、東から西へ延びる丘陵尾根上の最高所に位置。
 - 2) 命名：本居宣長『菅笠日記』（飛鳥探訪記）：明和9年(1772)3月2日に見学。
 - ①地元の言い伝え：「清酒を造る石」と記す。「酒を絞る石」説。
 - 3) 車石の発見：昭和10年、酒船石の南10mの場所で16個発見。
 - ①車石：長さ1m、幅0.4m、厚さ0.5mの花崗岩切石。上面の中央に幅10cm、深さ5cmの断面U字形の真直ぐな溝を穿つ。直角に曲がる溝がある石もある。
 - ②用途：酒船石への導水用。長辺側の側面を加工して並べる。
 - 4) 酒船石と車石：導水と水を使う一体的な施設。
 - ①性格：水の流れ方を見て占うなど呪術的儀礼のための施設。一種の庭園施設。
 - ②古代の庭園：単なる遊び、観賞用の施設ではなく、儀礼・呪術的性格の施設。
- 2、石垣の発見：1992年4～7月(第1次調査)。酒船石の西北方50mで発見。
 - 1) 立地：西へ延びる丘陵尾根の北斜面の中腹。水田との比高差30m。標高130m。
 - ①石垣の構築：旧地形を段状に整地し、その段上の平坦面に石垣を築く。
 - ②現状：平坦な段が丘陵の中腹(標高130m)をめぐる。
 - 2) 石垣の基礎：長さ1m、幅0.5mほどの花崗岩切石を一系列に埋め並べる。
 - 3) 花崗岩切石上：凝灰岩質砂岩切石を積み上げた石列。長10m分を発見。
 - ①凝灰岩質砂岩切石：長さ30cm、奥行20cm、厚さ15cmほど。外面側を丁寧加工。
 - ②石積み：7段を確認。本来は10段程度で、2m近い高さがあったらしい。
 - ③石垣下や裏側：版築工法で整地・裏込め。厚さ3m以上に及ぶ。
 - ④凝灰岩質砂岩の産地：天理市布留の石上神宮北方の「石上山」付近。
- 3、その後の調査：広範囲で花崗岩切石、凝灰岩質砂岩切石、版築などを確認。
 - 1) 凝灰岩質砂岩切石による石垣：酒船石がある丘陵の全体に及ぶ。
 - ①盆地側に延びる丘陵尾根：北・西・南、その奥部の全体に及ぶ(第2次調査)。
 - ②北へ延びる丘陵支脈：西斜面、北斜面、谷側の東斜面でも検出。
 - 2) 酒船石丘陵の南側にある丘陵尾根(天理教教会側)：南斜面で検出。
 - 3) 凝灰岩質砂岩切石による石垣：標高130m。版築を標高130m以上の地点で確認。
 - 4) 全体像：標高130m付近に凝灰岩質砂岩切石による石垣を広範囲に設ける。
- 4、酒船石丘陵西南部で大規模石垣を発見：飛鳥盆地(宮殿)側。4段を確認。第3次調査
 - 1) 丘陵頂部と斜面：旧地形を削り、版築によって大規模に整地して平坦地に造成。
 - 2) 最上段石垣(標高130m付近)：第1次調査と同構造の石垣。版築による裏込め。
 - 3) 第2段目の石垣(SX01)：標高121m付近。転落状態で検出。
 - ①石垣：長130cm以上、幅60cm以上、厚65cm以上の花崗岩切石(粗加工)を使用。
 - 4) 第3段目の石垣(SX06とSX03)：標高118.5m(石垣上面)。
 - ①石垣SX03：長さ180cm以上、高100cm以上、厚さ50cm以上の花崗岩による列石。
 - (a)花崗岩：前面を丁寧に加工。側面も加工。上面は平坦にするが粗い加工。
 - ②石垣SX06：石垣SX03の前面にある。SX03を修復したものか。0.7～0.2m大のやや小ぶりの花崗岩切石や割石を積む。
 - 5) 第4段目の石垣：丘陵裾部。高160cm、幅100cm、奥行120cm大の花崗岩切石を立て並べる。原位置で5石を検出。さらに東西に連なる。版築による裏込め。
 - ①切石加工：前面は丁寧に磨く。上面・側面を平坦に粗加工。
 - 6) 第4段目石垣の前面：凝灰岩質砂岩切石(35cm×30cm×13cm大)を敷き詰めた石敷
- 5、遺跡全体の様子、年代と性格：
 - 1) 石垣・列石：露出状態。西側(宮殿側)から見ると「石の山丘」のよう。
 - 2) 花崗岩切石使用の類例：古墳の石室、寺院の礎石・基壇化粧石、神籠石。
 - 3) 年代：第4段目石垣の前面の石敷上から天武朝頃の須恵器出土。

- ①版築に地震断層跡：天武13年(684)10月の南海地震跡か。石垣を何度か修築。
- 6、亀形石造物施設の発見：酒船石丘陵の北側の谷間。谷の最奥部で発見。
- 1) 谷の東側斜面・西側斜面：階段状石段、石垣で限り、その間を丁寧な石敷。
 - 2) 石敷の奥部：給水施設・小判形石造物・亀形石造物を組合せた水使い施設。
 - ①給水施設：砂岩切石を積み上げる。湧水を溜め、浄化する施設。
 - 3) 小判形石造物：南北長1.65m、東西幅1m。上面に幅93cm、幅60cm、深さ20cmの槽状の凹みを穿つ。北側の突起の中を径4cmの孔が貫通。
 - 4) 亀形石造物：全長約2.4m、幅2m。亀の顔・尾・手足を象形。南に顔、尾は北向
 - ①甲羅部：径1.25m、深さ0.2mの円形水槽状に彫り込む。
 - ②両目の間：溝を穿ち、そこから円形孔が甲羅側の水槽内に貫通。
 - ③尾部：水槽内側から円形孔が貫通。尾部上面に彫ったV字形溝につながる。
 - ④これら石造物：花崗岩製。丁寧な水磨き。精巧な作り。
 - 5) 南北石組溝：幅・深さ50cm。バラス敷。亀形石造物の排水を受ける。数回の修築
 - 6) 施設全体の規模：東西35m、南北30m以上。
 - 7) 亀：漢民族は神聖な動物、めでたく瑞兆ともなる動物として篤く信仰。
 - ①蓬莱山：漢民族の神仙思想で説かれる仙境。不老不死の仙人が住む神山。
 - ②不老不死の仙郷である蓬莱山：亀に負われていると考えられている。
 - 8) 遺跡の性格：道教的な神仙思想を基にした宮廷の水に関わる祭祀・儀礼施設。穢れ祓いを行う禊の祭祀・儀礼施設。酒船石と関連する施設。
 - ①意義：皇極・斉明朝の宗教・精神史を具体的に語る施設。

D、飛鳥京苑池—豪壮な石組池—

- 1、位置・立地：明日香村大字岡小字出水。飛鳥川右岸川岸の低位段丘面に立地。
 - 1) 後飛鳥岡本宮・飛鳥浄御原宮との関係：内郭の北西角から北西へ100mに位置。
- 2、「出水の酒船石」発見：大正5年(1916)5月1日、字出水の田圃で排水溝掘削中に発見
 - 1) 碧雲荘庭園へ搬出：京都市左京区南禅寺下河原町。庭石として搬出。
 - ①碧雲荘庭園：野村徳七別邸。池泉回遊式。近代の名造園師・小川治兵衛が大正6年から造り始め、12年(1923)頃にほぼ完成。
 - ②石造物：大正13年の記録に庭園内の笕として設置されているとある。
 - 2) 野村徳七(得庵)：1878～1941。実業家。1918年、大阪野村銀行設立(大和銀行、現りそな銀行)。1925年、野村証券独立。野村財閥を築く。古美術品収集家。
 - 3) 2個の石造物：滑り台形石造物と水槽形石造物。組合わせて水を受け流す。
 - ①滑り台形石造物：長さ3.2m、上幅0.65m、高さ1m余。上面に幅10cm、深さ20cmの溝を彫る。途中2ヵ所に溜り。先へやや蛇行し、先端に径6cmの円孔を穿つ。
 - ②水槽形石造物：長2.4m、幅1.8m、厚さ0.6m以上。上面に長さ1.2m、幅1mの楕円形水槽を穿つ(深さ6cm)。中央に先に尖る形の溝(深さ1.5cm)を穿つ。
- 3、発掘：奈良県立橿原考古学研究所。1999～2002年、2010～2015年。
 - 1) 発見遺構：南池、南池内の中島・浮島、渡堤、北池、北へ延びる石組水路、岸辺の砂利敷、掘立柱建物、庭園を囲む掘立柱塀・門など。
 - ①規模：南池と北池で南北100m、東西50m～60m。水路を含めて南北230m。
 - ②池の特色：大石積み直線の岸辺、垂直護岸。底石敷。朝鮮半島苑池の影響。
 - 2) 南池：おむすび形。南北55m、東西最大65mほど。
 - 3) 南池南端：石造物2個の抜き穴を確認。旧位置が判明。さらに石造物2個を発見
 - ①池内南端の石造物：台形台状。花崗岩製。高さ1.65m。頭部幅0.82m、同長0.94m。池の石敷上に据える。上部に貫通孔(径9cm)と上面に長方形穴を穿つ。
 - (a)機能：滑り台形石の先端穴からの水を樋で受け、池の水面に噴出する石造物。
 - ②南岸の石造物：大正5年発見の石造物抜き穴の東に接する位置。
 - (a)形状・大きさ：平石(長2.7m、幅2.06m、厚さ0.55m)の内側を不整形槽状に二段彫り(深さ41cm)。西端側面に径4cmの円孔を穿ち、外側を碗形に加工。
 - ③大正5年発見の石造物：これら石造物と組合う苑池への導水施設。水飾り。

- 4) 北池：北東隅確認。南北約54m、東西約36mの南北に長い長方形平面と判明。
 ①階段状石積み護岸：東岸の北端と西岸の南端で確認。船着場か。
 ②池底：50cm大の川原石敷。池の東側はバラス敷。東20mに南北堀の石組雨落溝。
- 5) 出土遺物：木簡(131点)、木製品、斎串、土器、自然遺物など。
 ①紀年銘木簡：「丙寅年」(666)、「戊寅年」(678)、「戊子年」(688)、8世紀初頭。
 ②記載内容：典葉寮・造酒司・大炊寮など大宝令制下の宮内省管轄の官司名。
 ③葉・処方箋木簡：葉園も併設か。
 ④「嶋官」の墨書：木製容器の蓋に墨書。苑池を管轄する役所のこと。
- 6) 出土土器：7世紀中葉から後半のものが多い。平安時代に池を廃棄。
- 7) 自然遺物：水生植物(蓮)、池の周囲に桃・梨・梅・柿などの果樹や松類を植える
- 4、年代：斉明朝に造り、天武期に整備。王宮付属の苑池。新羅の雁鴨池に類似。
 1) 『日本書紀』天武14年(685)11月6日条：「白錦後苑に幸す」。
 2) 『日本書紀』持統5年(691)3月5日条：「天皇、公私の馬を御苑に観たまふ」。
- 5、2011・2012年度の発掘：南池の東岸・南岸を確認。
 1) 東岸：高さ3m以上の積石護岸(垂直に近い)。下半は1~1.5m大の大石、上半は0.5~0.7m大の石を積み上げた豪壮なもの。
 2) 南岸：東岸から西岸に向って次第に低くなり、西端での高さ約1.3m。
- 6、2013~2015年：中島と渡堤の南岸、庭園を囲む掘立柱塀と門などを調査。
 1) 中島：南池の北寄りに位置。ヒトデ形。東西約32m、南北約15m。石組護岸。
 ①柱穴：中島を囲んで約120ヵ所確認。東西35m、南北17mの範囲。総柱状に配置
 ②南池南岸沿い：東西15m、南北10mの範囲に約40ヵ所の柱穴。
 2) 東限塀：南北130m以上。石組雨落溝を伴う。南端で東西塀につながる。
 ①性格：庭園の周囲を囲む塀。屋根付き。柱間8~9尺。
- 7、古代中国・朝鮮半島の宮廷付属庭園：不老不死の仙境を造形。池内に蓬萊島などの中島を設ける。支配領域内の奇岩・奇石、動物・植物を集めて支配地を象形。
 1) 飛鳥京苑池：動植物園、葉園などを含む。さまざまな機能を果たした聖域。

E、水落遺跡・石神遺跡

- 1、位置：明日香村飛鳥。飛鳥盆地の南北の中央。飛鳥川右岸で、飛鳥寺の西北方。
- 2、水落遺跡：斉明紀6年(660)5月条に「皇太子、初めて漏刻を造る。民をして時を知らしむ」とある水時計と水時計台建物跡。後の「陰陽寮」に相当する役所の建物群。
 1) 水時計台建物：4間×4間(10、95m四方)の平面正方形。総柱様建物。
 ①柱の立て方：地下に据えた礎石上面の繰込み穴に柱(24本、径40cm)を立て、基壇土を盛って地中に埋め立てる。
 ②基礎工事：掘込地業(一辺40m、深さ3m)。版築。礎石と地中梁工法。入念な工事
 ③基壇周囲の貼石構造物：一辺22、4mの正方形。0.5~3トンの大石約1500個を使用
 ④建物の復原：楼状建物。方形基壇とともに、「台」と呼べる構造。
 ⑤建物の造営：精度の高い造営、特殊な工法を採用。
- 2) 付属建物群：四方に配する。大規模で整然、精緻な造営。周囲の全面を石敷舗装
 ①柱穴：一辺1.5~2mの整った方形、深さ1.2~2mと大きい。
- 3、石神遺跡：飛鳥寺の西北方。水落遺跡の北に続く遺跡。大垣で隔てる。
 1) 須弥山(像)造立記事(『日本書紀』)：斉明3年(657)、5年(659)、6年(660)の3度
 ①造立場所：飛鳥寺の西で飛鳥川までの間。水落・石神遺跡の一帯。
 ②須弥山(像)造立の年代：水落・石神遺跡の最盛期と一致。
 2) 須弥山石・石人像：明治35年(1902)に小字石神で出土。噴水石。庭園の飾り。
 3) 須弥山石：3石以上から成る。全体の形はダルマ落し形。
 ①外面：上部に「山岳」、下部に海を表す「波」を浮彫。
 ②内側：水槽。水槽へ水を汲み上げる貫通孔、水槽底から外へ小孔。
 ③噴水石：水槽から流れ出る水が波形の浮彫を濡らす。
 ④須弥山石：仏教の世界観でいう、世界の中心、四海に囲まれて中央に聳える聖な

る高山「須弥山」を象ったもの。3度登場する「須弥山」のいずれかに相当。

⑤本来の造立地：石神遺跡か、その近傍。

4) 須弥山石・石人像の性格：園池の水飾り。噴水。水カラクリ。

①齊明6年5月の記事：「石上池」のほとりに、塔のように高い「須弥山像」を造立。

5) 石神遺跡の遺構：大規模建物群、石敷広場、大井戸と石組暗渠、大規模な石組溝木樋による水道網、石組池、噴水石など。

①大規模掘立柱建物群：計画性高く、精緻な造営。宮殿建築の中でも超一級。

②西区：長廊状建物で囲まれた一郭と、大規模な正殿。建物周囲の全面を石敷舗装

③東区：6棟の掘立柱建物群。建物周囲の全面を石敷舗装。

④一郭の範囲：南北150m、東西180m。周囲を掘立柱塀で囲む。

⑤南限大垣：飛鳥最大。屋根を備えた掘立柱塀。

6) 齊明・天武天皇時代の石神遺跡の性格：蝦夷・隼人など朝廷の支配下に入った夷狄、新羅からの朝貢使節などに対する服属儀礼を執行する場。

①儀礼を示す遺物：東北地方産(蝦夷)の土器、新羅産の陶器などが出土。

②彼らの朝貢に対して：冠位(官位)を授け、物を賜り、饗宴・歌舞の行事を行い、支配と服従の関係を確認する儀礼を執行する場所。

4、水落遺跡・石神遺跡が語る齊明朝の土木・建設工事の特色：広範囲に及び、大規模で、計画性の高い、精緻入念な造営。

1) 齊明期の建物群の柱穴：天武期のそれをはるかに凌駕する大規模なもの。

2) 石敷・石組・貼石工法の盛んな採用。巨石を用いた工法の盛行。

①齊明紀の「宮の東山の石垣」(「石山丘」)の記事を彷彿とさせる。

5、後飛鳥岡本宮(齊明天皇の宮殿)の構造：

1) 宮廷付属施設・役所など(服属儀礼施設・陰陽寮など)：天皇が住む後飛鳥岡本宮とは別の場所で、飛鳥盆地の所々に設ける。

2) 後飛鳥岡本宮の構造：天皇が住む内裏と朝堂、それに天皇の日常生活に深く関わる役所(宮内省)からなる。

3) 服属儀礼の場：齊明～天武天皇と天皇の代が替わっても同じ場所で継承。

6、同様の大規模遺跡：飛鳥各所で発見。山間の傾斜地(造成地形)、狭い平坦地など。

1) 遺跡分布：藤原宮下層など空間利用が飛鳥と周辺の広域に及び、濃密化。

F、『日本書紀』が語る齊明朝(皇太子中大兄皇子)の土木工事

1、齊明天皇の人物像：『日本書紀』は土木工事を興すことを好む女帝として描く。

1) 齊明元年(655)：「小墾田」の地に、初めて瓦葺宮殿の造営を計画。深山に用材を求めたが、用材が腐って造営を断念。

①齊明天皇の意図：本格的で、恒久的な宮殿の建設を計画。

2) 齊明2年(656)：香久山の西より、「石上山」まで大溝を掘り、舟200隻を使って、「石上山」の石を運んで、「宮の東山に石垣」(「石上丘」)を築く。

①渠の掘削にのべ3万人、石垣の建設にのべ7万人の功夫を費やす。

②時の人：この溝を「狂心ノ渠」と呼び、その土木工事を非難。

③齊明2年紀の「石上山」：従来説は天理市布留の「石上」付近の山。

3) その他の土木工事：大きな倉庫を建て、民財を集め収納。

4) 多武峯：「両槻宮(ふたつきのみや)」=「天宮(あまのみや)」に「観」(道教の寺院)を造る。

→齊明天皇は次々と土木工事、建設工事を興したと記載。

2、有間皇子事件と齊明天皇の三失政：

1) 齊明4年(658)11月：孝徳天皇の皇子・有間皇子(640～658)の反逆事件が勃発。

①齊明天皇が紀伊のムロ温泉(白浜)行幸中：蘇我赤兄にそそのかされて反逆。

2) 『日本書紀』：蘇我赤兄があげた三失政を、反逆事件の誘因として記す。

3) 齊明天皇の三失政：

①大きな倉庫を建て、民財を集め積んだこと。

②長く渠を掘り、公糧を費したこと。

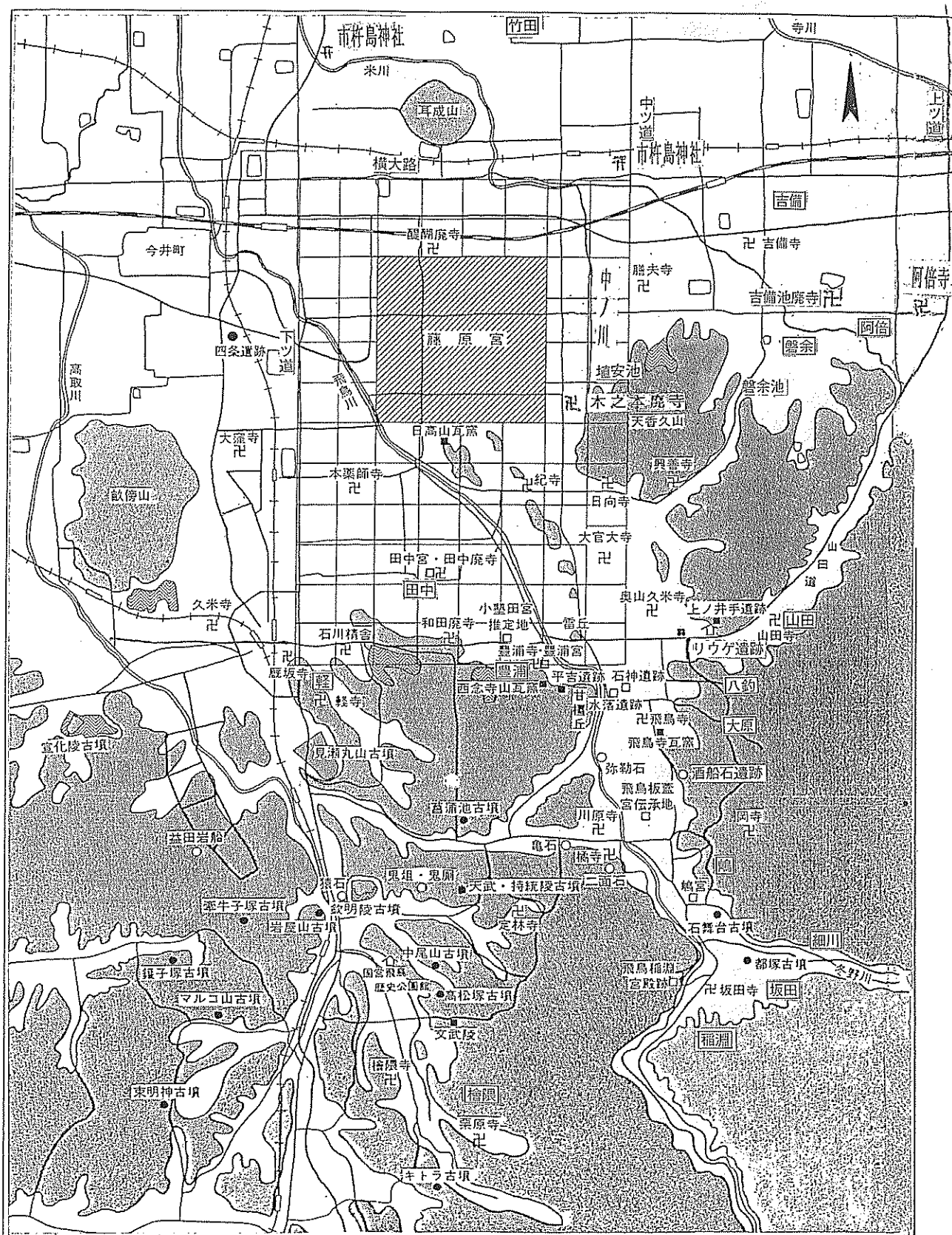
③舟に石を積んで運び、積んで石丘としたこと。

→「狂心ノ渠」の掘削、「石山丘」の構築など次々と大土木工事を興したことが事件の誘因となったと記載。

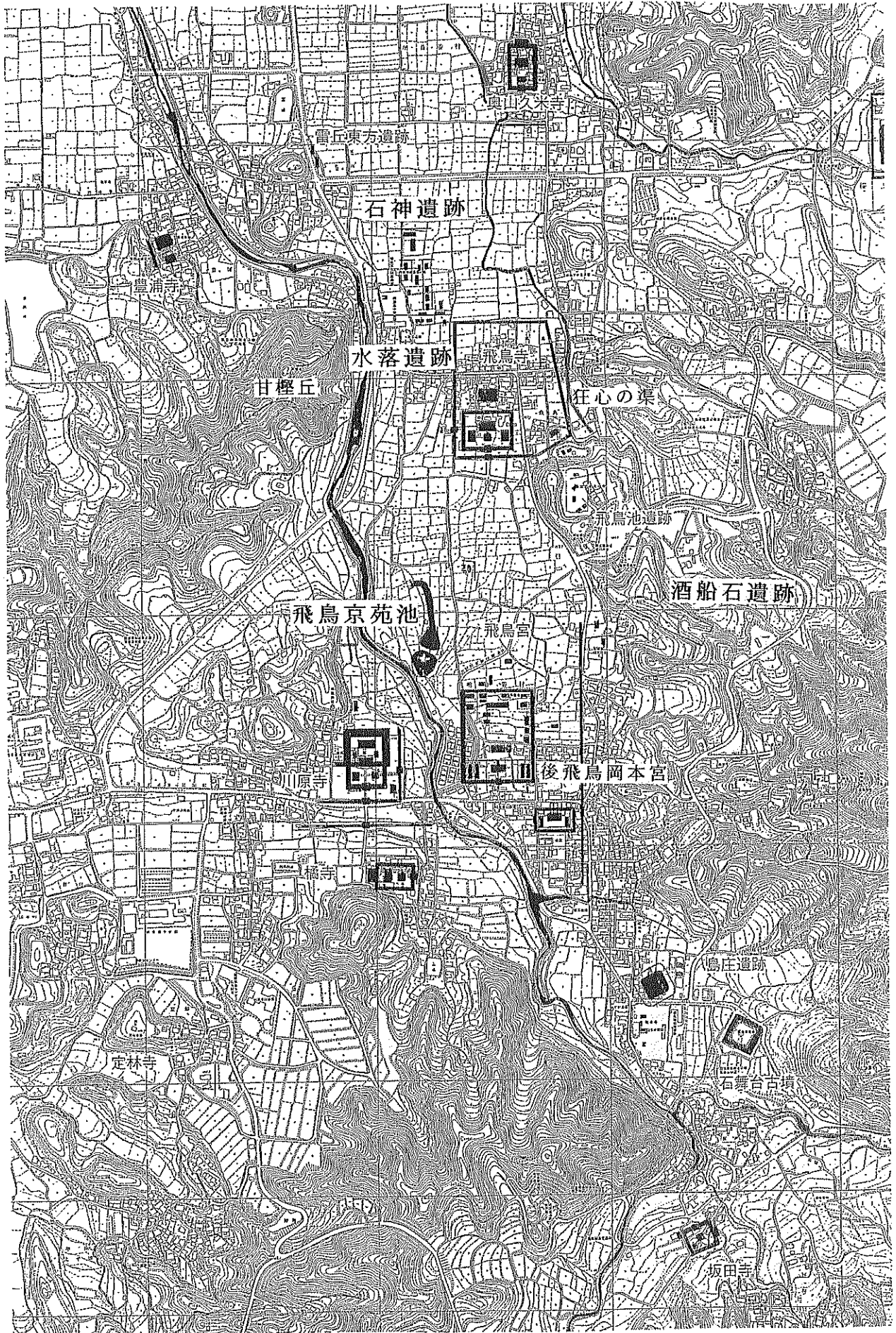
- 4) 三失政と「狂心ノ渠」：定説では、行き過ぎた土木工事で、国力に不相応なものであったから批判されたのだと説明する。
 - 5) この理解は正しいか、十分か？：権力の恣意性(気まま)だけが強調されて、何を意図して土木工事を興したのか、解き明かすことができない。
- 3、酒船石遺跡の性格：斉明2年(656)紀に見える宮の東山に築いた「石垣」「石山丘」跡。
- 1) 盛んに土木工事を興した斉明天皇の事業を象徴的に示す遺跡。
 - 2) 凝灰岩質砂岩の石材：天理市布留の「石上山」付近産出の石を使用。
 - 3) 斉明天皇の後飛鳥岡本宮の位置：飛鳥宮跡上層。酒船石遺跡の西側。

G、『日本書紀』の記事と発掘成果に見る斉明朝の都づくり

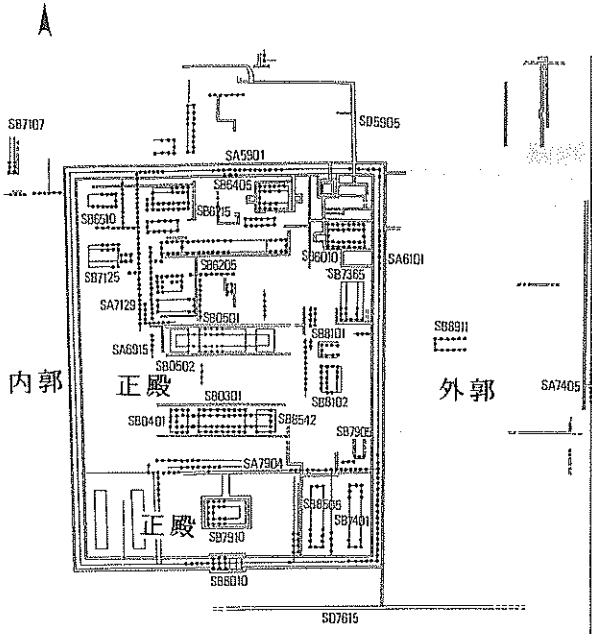
- 1、斉明天皇が「大土木工事を次々と興した」ことの再評価：
 - 1) 斉明紀の記事：後飛鳥岡本宮跡、酒船石遺跡、水落・石神遺跡、飛鳥京苑池など飛鳥諸遺跡の発掘成果を総合して考えることが必要。
- 2、斉明朝の都づくり：かつてないほど本格的で、大規模な都づくりが行われ、空間利用も飛鳥盆地のみでなく、後の藤原京域をも含む広範囲に及び、濃密になる。
- 3、「京」の存在を示す最初の記事：斉明5年(659)7月条の「群臣に詔して、京内諸寺に孟蘭盆経を説かしめ……」。
 - 1) 都づくりの本格化、空間利用の広域化、濃密化：飛鳥盆地を中心に「都市的景観」が形成され、特別行政区としての「京」が成立。
 - 2) 飛鳥の「京」：「壬申の乱」の記事に見える「倭京」。条坊制的な街路・街区を伴う。
- 4、水時計の初造・水時計時刻制の導入と都づくり：
 - 1) 水時計・水時計台の初造：「京」の成立、すなわち「都民」の居住区の成立と相関。
 - 2) 官僚制の整備・展開：官位制が多段階となり、役人層が増大。
 - ①役人層の居住区：飛鳥と、その周辺の広域に及ぶようになる。
 - 3) 水時計の初造・水時計時刻制の導入：役人層の宮殿への出退の刻限を規定、すなわち政治を明確な時刻制の下で行おうとする政治的意図から出たもの。
 - ①水時計台からの報時：役人層の居住区に聞こえる必要がある。
 - 4) 水時計台建設の意図：こうした「飛鳥の都の広域化」＝「京域の成立」と相関。
 - ①本格的で、画期的な「都づくり」が行われたことと直接に関係。
 - ②水時計台の建設：飛鳥での「画期的な都づくり」の一環であった。
- 5、瓦葺宮殿の造営計画：
 - 1) 従来の掘立柱式宮殿の耐用年限：20年ほど。伊勢神宮の式年遷宮。
 - 2) 瓦葺宮殿の造営：唐を中心とした国際社会に伍して、文明国家の宮殿をそれに相応しい「大陸様式の本格的、恒久的なもの」とする政治的狙いによって計画。
- 6、「狂心ノ渠」の掘削の意味：飛鳥の都づくりと関係。
 - 1) 「狂心の渠」跡の発見：飛鳥池遺跡東方、飛鳥坐神社西方、香久山西麓など。
 - ①運河状の水路跡の発見：幅5～10mで、長さ数kmに及ぶ。
 - 2) 香久山西麓を北に流れる「中ノ川」：7～8世紀の「狂心ノ渠」跡。
 - ①「中ノ川」：香久山の西麓を北流する用水路。「掘川」の地名が残る。
 - ②旧状：幅10～15mの凹地が南北に延びる。
 - ③発掘成果：鎌倉時代以前まで遡る大規模な南北溝を発見。米川につながる。
 - 3) 「狂心ノ渠」：飛鳥の都づくりのための造営資材を運び込むために掘削・整備。
- 7、有間皇子事件で三失政、「狂心の渠」と非難されたことの内実：
 - 1) 斉明朝の都づくり：時代を先取りしたような画期的な内容のものだったために、その建設事業が「行き過ぎた土木工事」と映り、批判・反発を買ったのだろう。
 - 2) 実質的な主導：皇太子中大兄皇子。
 - 3) 本格的な都づくりの着手：蘇我氏滅亡後の飛鳥の再開発の一環であった。



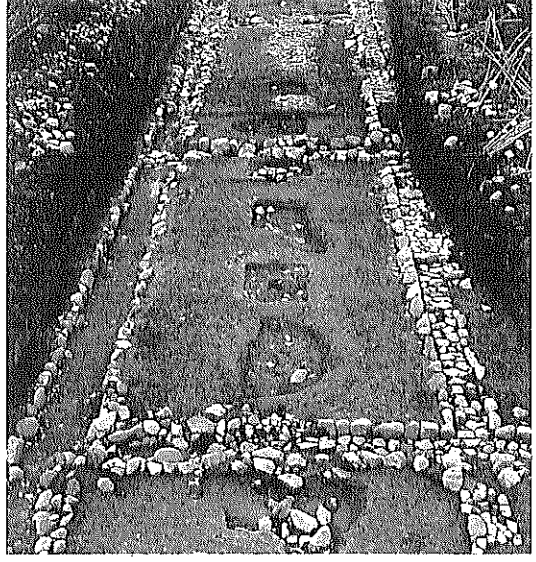
1、飛鳥・藤原地域の宮都・寺院・古墳などの分布



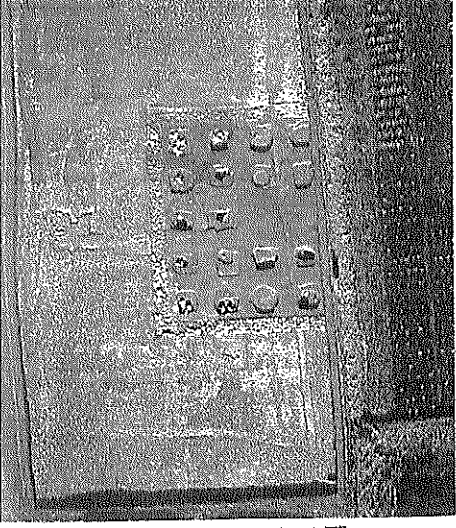
1、飛鳥中心部の宮殿・寺院など



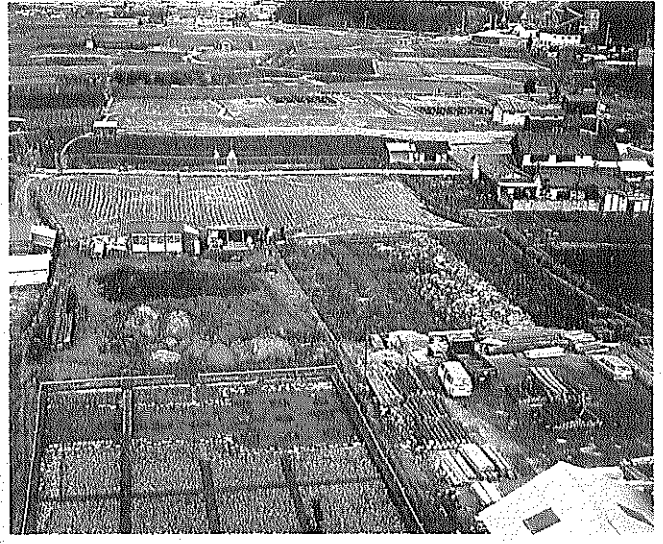
1、飛鳥宮Ⅲ期A(後飛鳥岡本宮)の遺構



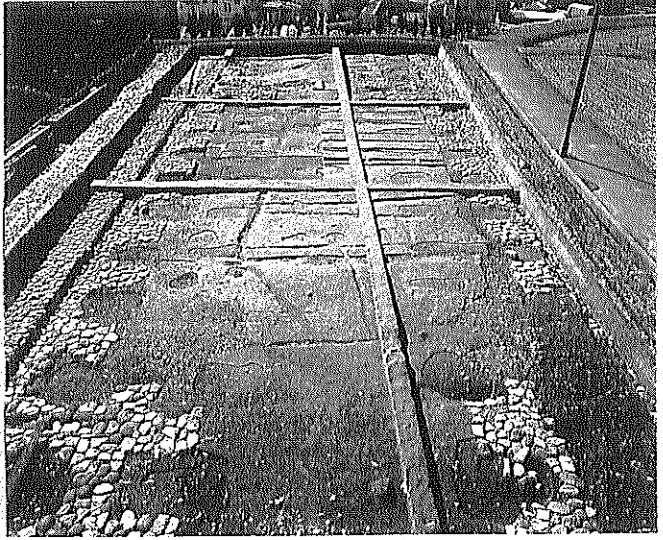
2、内郭北辺掘立柱塀(東から)



4、内郭南区画正殿



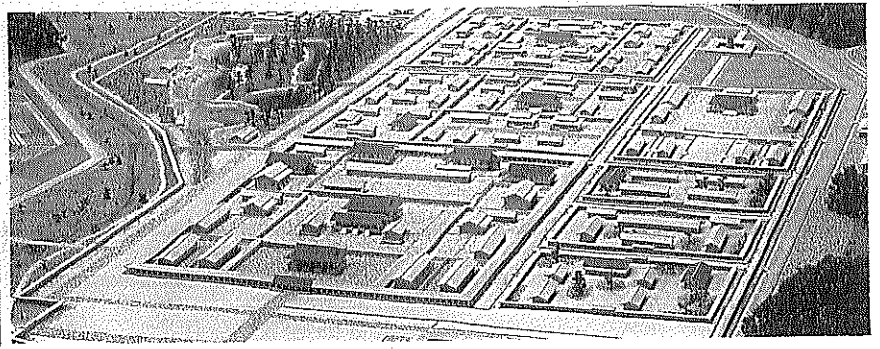
3、内郭南門と南辺掘立柱塀(南から)



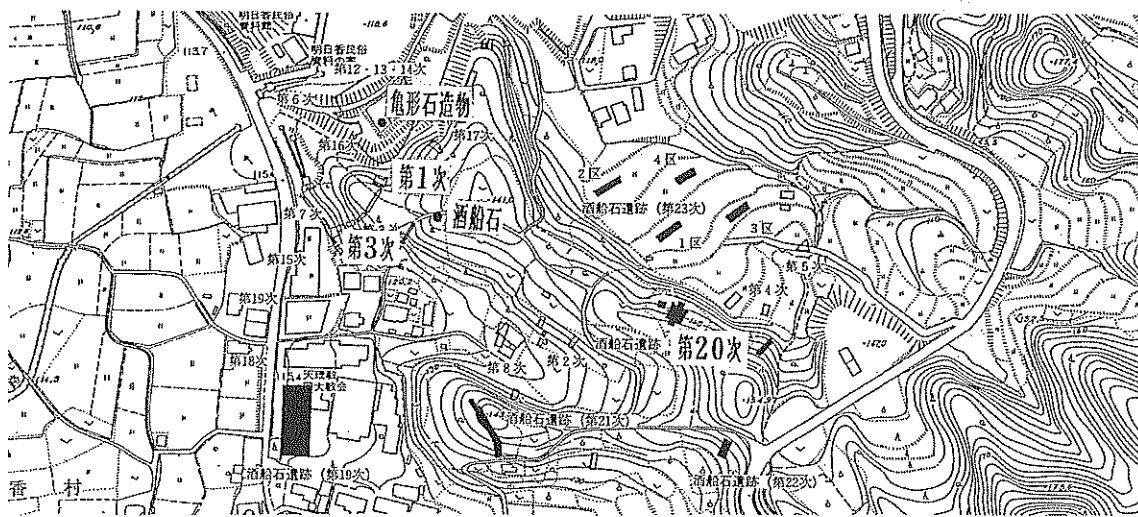
5、内郭北区画の南正殿(東から)



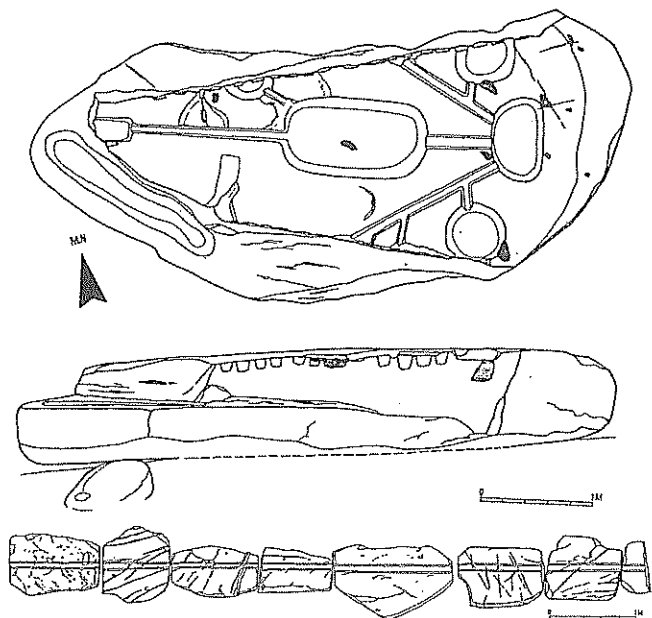
6、内郭北区画の北正殿(南西から)



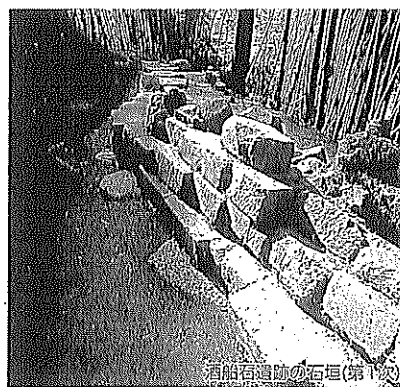
7、飛鳥宮Ⅲ期A(後飛鳥岡本宮)の復原模型



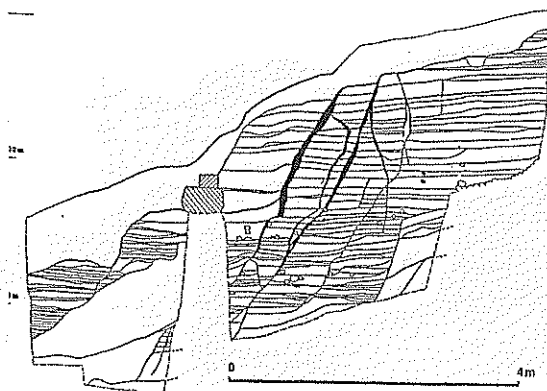
1、酒船石遺跡の発掘地点



2、酒船石と車石 車石



3、酒船石遺跡の上段石垣



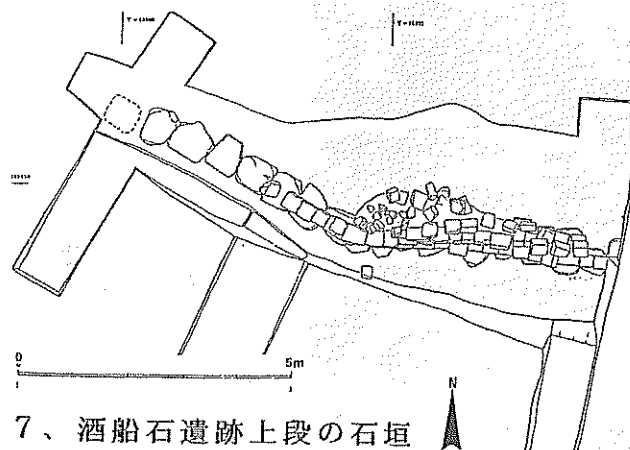
4、上段石垣と版築整地



6、砂岩石垣の基礎石列



7、酒船石遺跡の巨大石垣



7、酒船石遺跡上段の石垣

E 1、齊明紀の造営関係記事など

(1) 「日本書紀」齊明元年(六五五)十月十三日

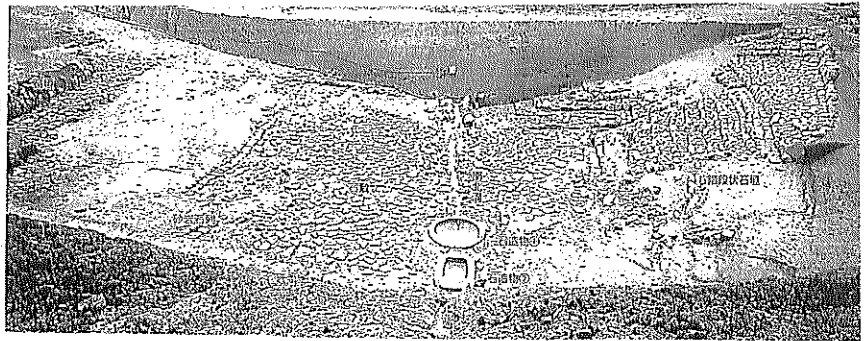
冬十月の丁酉の朔己酉に、小墾田に、宮闕を造り起てて、瓦覆に擬將とす。又深山廣谷にして、宮殿に造らむと擬る材、朽ち爛れたる者多し。遂に止めて作らす。

(2) 「日本書紀」齊明二年(六五六)是歳

是歳、飛鳥の岡本に、更に宮地を定む。時に、高麗・百濟・新羅、並に使を遣して調進る。爲に紺の幕を此の宮地に張りて、變たまふ。遂に宮室を起つ。天皇、乃ち遷りたまふ。號けて後飛鳥岡本宮と曰ふ。田身嶺に、冠らしむるに周れる垣を以てす。田身は山の名なり。此をば大務と云ふ。復、嶺の上の兩つの榎の樹の邊に、觀を起つ。號けて兩槻宮とす。亦是天宮と曰ふ。時に興事を好む。廻ち水工をして渠穿らしむ。香山の西より、石上山に至る。舟二百隻を以て、石上山の石を載みて、流の順に控引き、宮の東の山に石を累ねて垣とす。時の人の誘りて曰はく、「狂心の渠、功夫を損し費すこと、三萬餘。垣造る功夫を費し損すこと、七萬餘。宮材爛れ、山椒埋れたり」といふ。又、誘りて曰はく、「石の山丘を作る。作る隨に自づからに破れなむ」といふ。若しは未だ成らざる時に據りて、此の誘を作せるか。又、吉野宮を作る。

(6) 「日本書紀」齊明四年(六五八)十一月三日

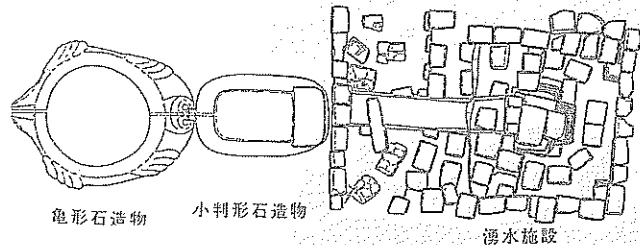
十一月の庚辰の朔壬午に、留守官蘇我赤兄臣、有間皇子に語りて曰はく、「天皇の治らす政事、三つの失有り。大きに倉庫を起てて、民財を積み聚むること、一つ。長く渠水を穿りて、公糧を損し費すこと、二つ。舟に石を載みて、運び積みて丘にすること、三つ」といふ。有間皇子、乃ち赤兄が已に善しきことを知りて、欣然びて報答へて曰はく、「吾が年始めて兵を用ゐるべき時なり」といふ。甲申に、有間皇子、赤兄が家に向きて、樓に登りて謀る。夾膝自づからに断れぬ。是に、相の不祥を知りて、俱に盟ひて止む。皇子歸りて宿る。是の夜半に、赤兄、物部村井連船を遣して、宮造る丁を率ゐて、有間皇子を市經の家に圍む。



2、酒船石遺跡の亀形石造物・小判形石造物・石敷



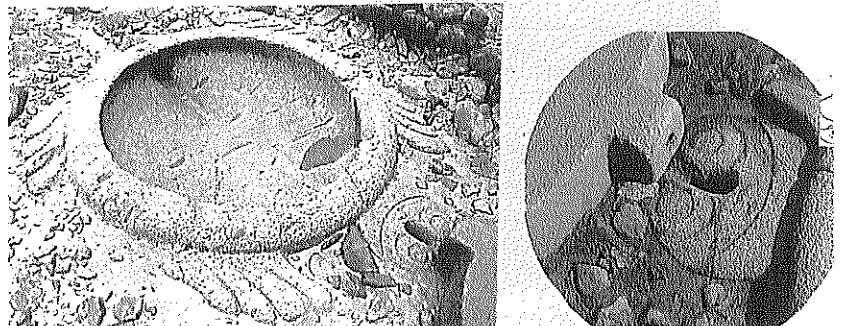
6、狂心の渠跡(飛鳥垣内遺跡)



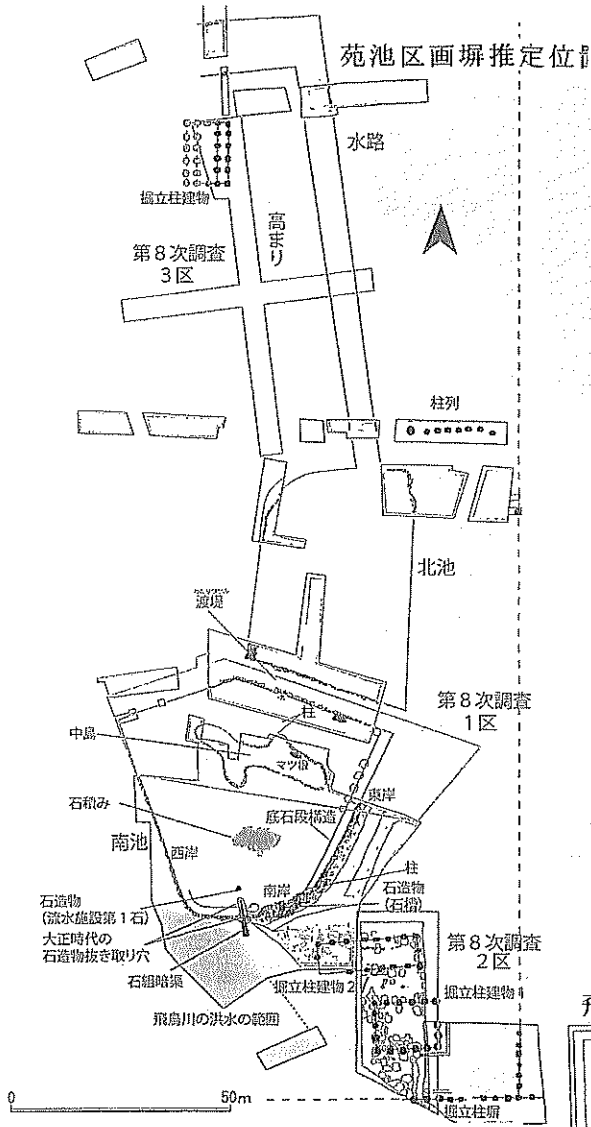
3、石造物群と湧水施設



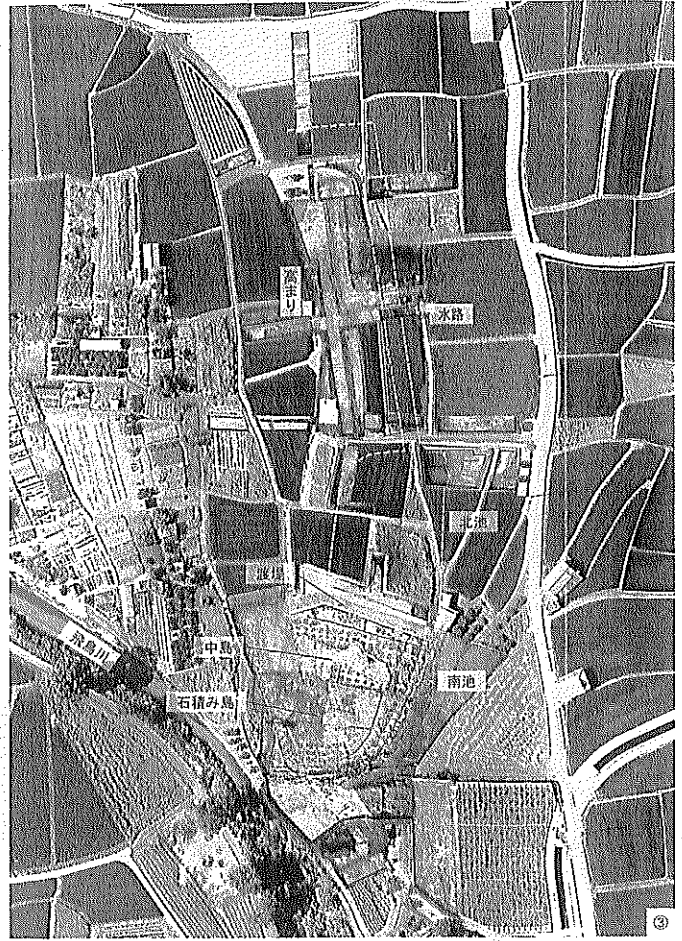
4、石造物群と湧水施設(北から)



5、亀形石造物と水槽の様子

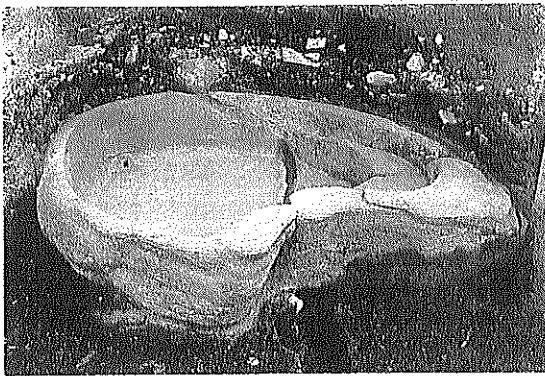
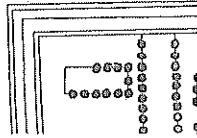


1、飛鳥京苑池全体図

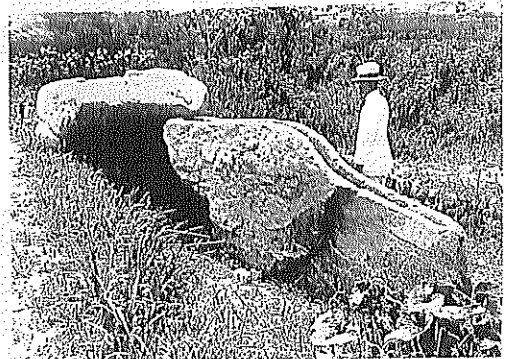


飛鳥宮跡内郭

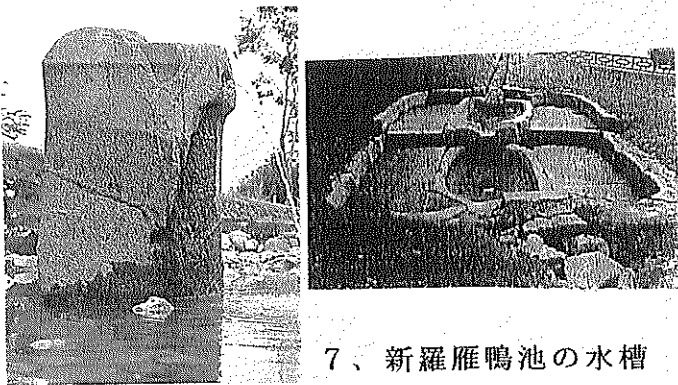
2、飛鳥京苑池全景



4、水槽形石造物

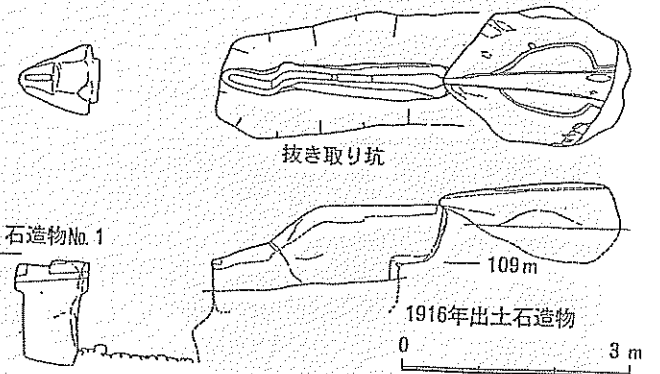


3、「出水」の酒船石(1916年)



7、新羅雁鴨池の水槽

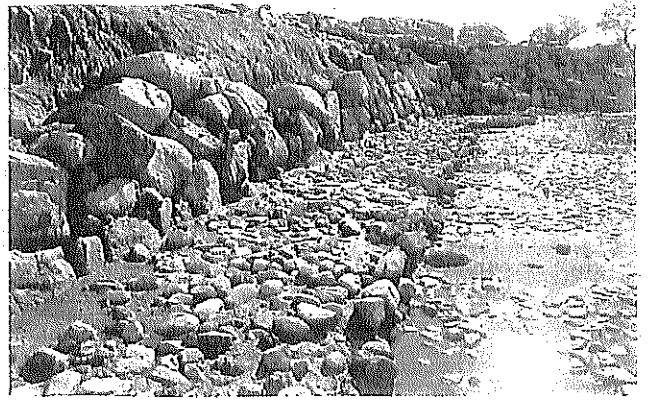
5、池内石造物



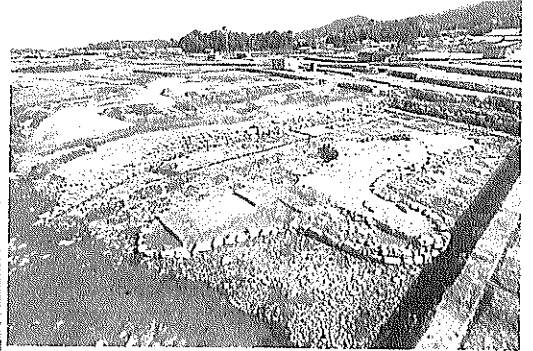
6、「出水」の酒船石と新発見石造物



1、飛鳥京苑池の南池と中島



2、南池の東岸と底石敷



3、南池の中島と渡堤



5、水路跡(北から)



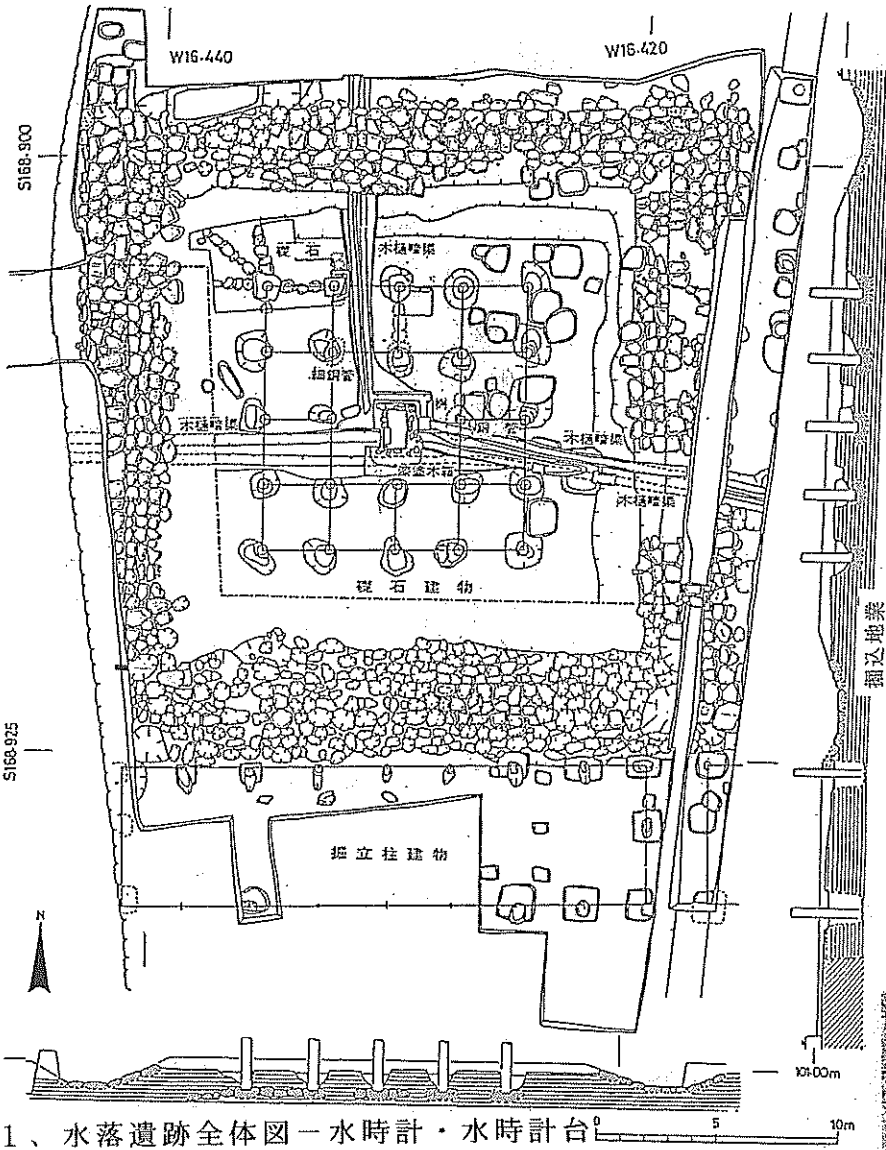
7、水落遺跡の礎石と地中梁



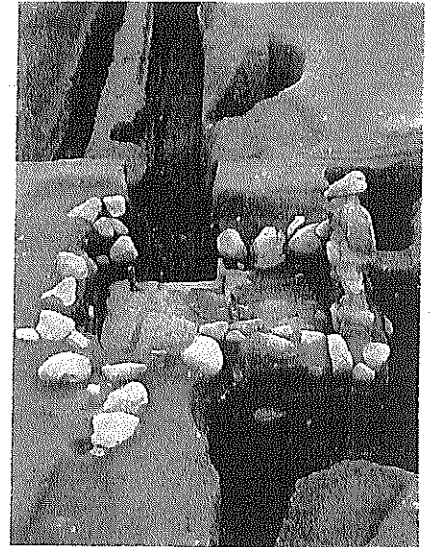
4、南池の中島と底石敷



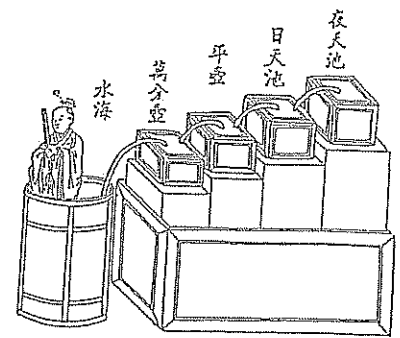
6、水落遺跡(水時計台跡)全景



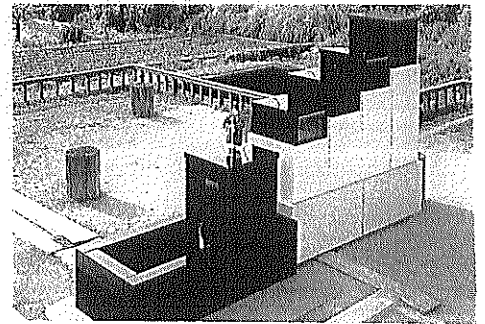
1、水落遺跡全体図－水時計・水時計台



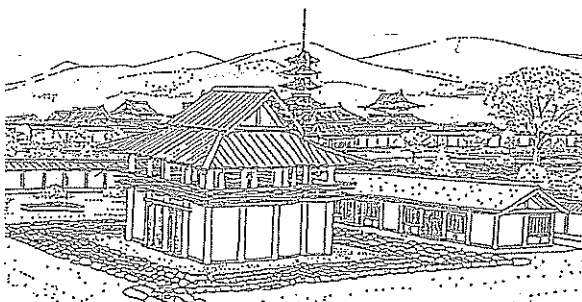
2、漆塗木箱と地下水路



3、唐・呂才の水時計



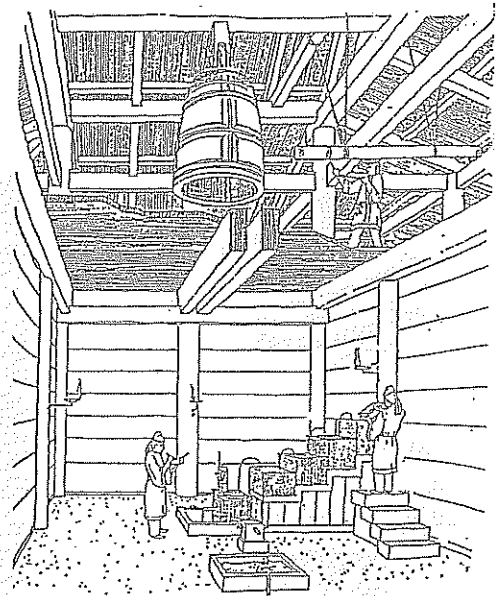
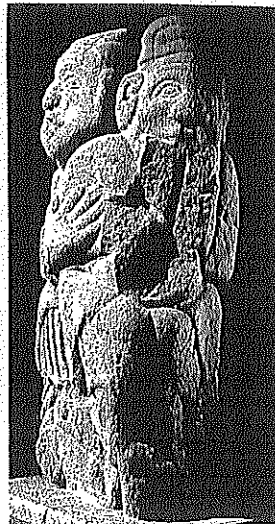
4、水時計の復原



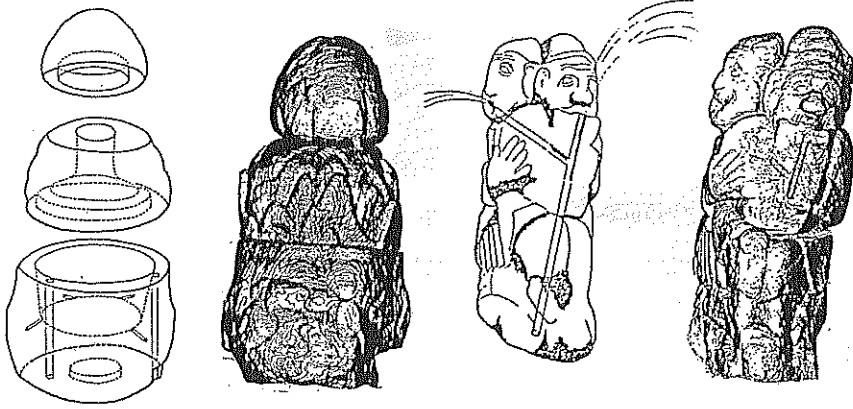
6、水落遺跡と飛鳥寺復原



7、石神遺跡出土の
須弥山石・石人像



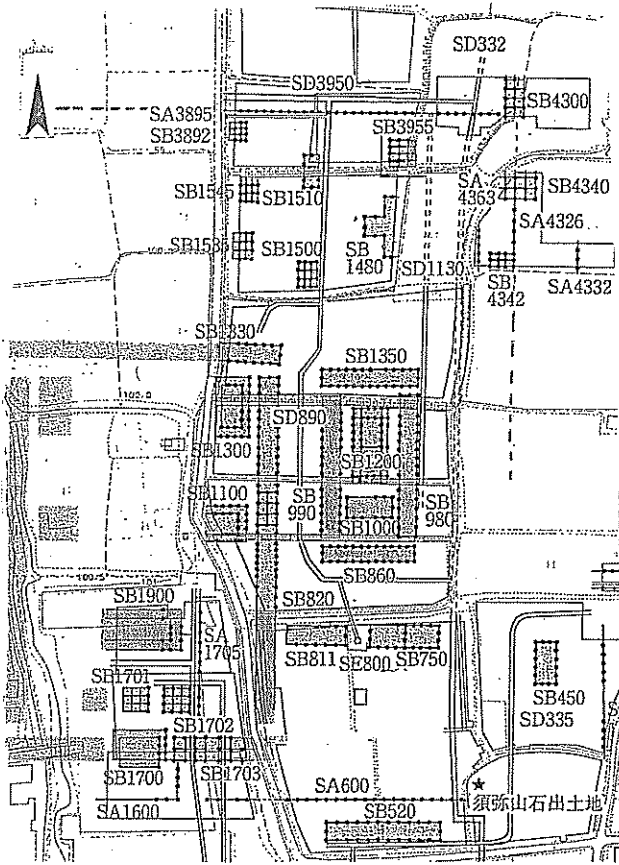
5、水時計台内部の復原



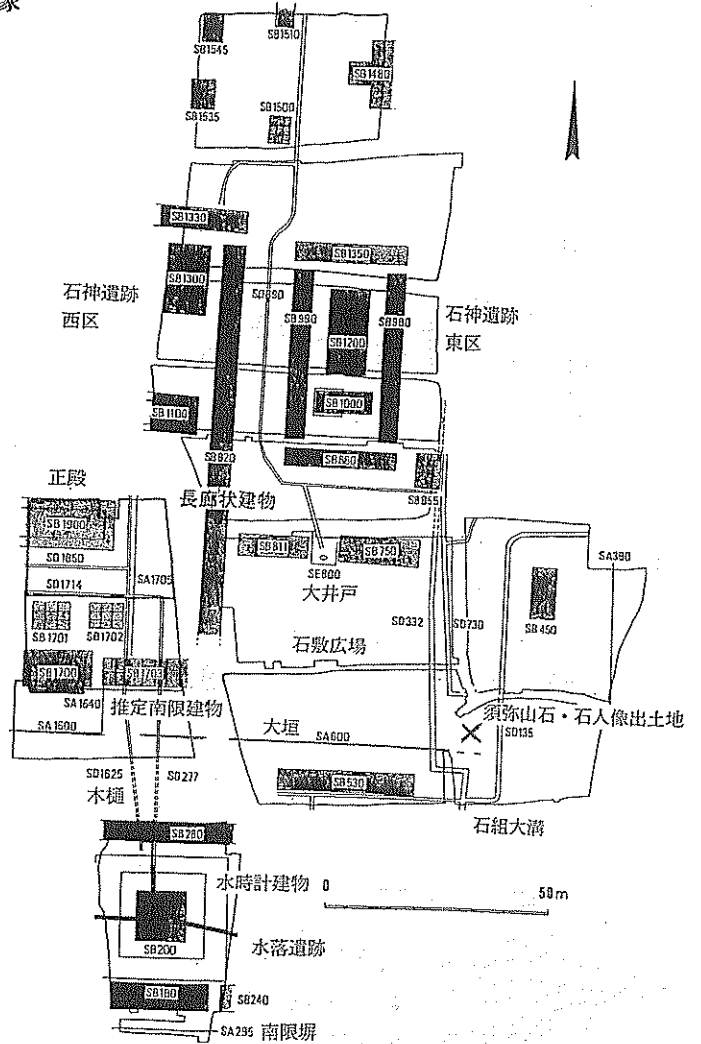
1、石神遺跡出土の須弥山石と石人像



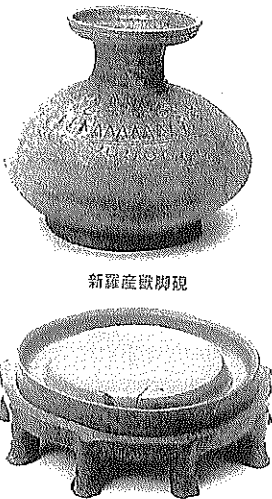
2、石神遺跡の石組溝・暗渠網



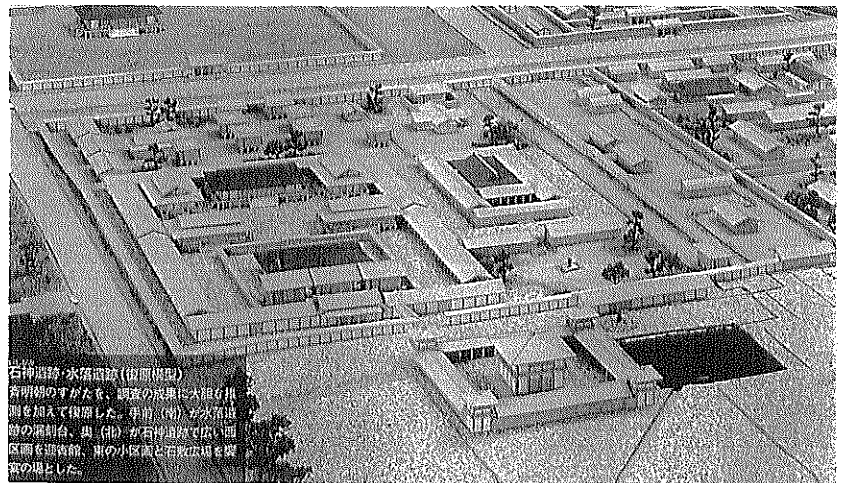
4、斉明朝の石神遺跡



3、斉明朝の水落遺跡・石神遺跡



6、新羅産の細頸壺と硯



5、斉明朝の水落遺跡・石神遺跡の復原模型